ISRAEL — PALESTINE — JAPAN

平和の架け橋 PROJECT 2019

SENDAI ▸ NAGANO ▸ TOKYO

Project Report 2019

報告書

主催
認定NPO法人 聖地のこどもを支える会

共催
中東のための ヨハネ・パウロⅡ世財団

Organizer :
CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION
HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND
Co-organizer :
JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST

ISRAEL — PALESTINE — JAPAN

平和の架け橋 PROJECT 2019

SENDAI ▸ NAGANO ▸ TOKYO

Project Report 2019 報告書

主催
認定NPO法人 聖地のこどもを支える会

共催
中東のための ヨハネ・パウロⅡ世財団

Organizer :
CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION
HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND
Co-organizer :
JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST

写真　信州善光寺本堂前で、恒例の盆踊り大会

8月7日、長い旅を終えて成田空港到着。これから始まる「平和の架け橋」プロジェクトへの期待に
胸を膨らませて。(未知の世界への多少の不安も)

目　次 Contents

謝辞　Gratitudes 4

1 プロジェクトの主旨と概要 6
Purpose and Outline of the Project

2 総括 7
Summary of the Project

平和のメッセージ 10
Messages of Peace

3 準備　Preparations

1. 準備（日本とイスラエルパレスチナで） 12
Preparations（in Japan & in Israel-Palestine）

2. 日本人参加者の事前研修 13
Preparatory Seminars for Japanese participants

3. エルサレムでの事前研修 14
Preparatory Seminars in Jerusalem

4. プロジェクト支援イベント 15
Charity events

4 プロジェクトの経過 18
Daily Reports of the Project

5 収支決算 24
Balance Sheet

6 参加者の声
Feedback from the Participants

青年参加者の声 26
Voices of the Young Participants

スタッフの声 36
Voices of the Staff

7 名簿 40
Lists of names

仙台国際交流イベントでプロジェクト参加者の自己紹介。

謝　　辞

主催者　認定特定非営利活動法人 聖地のこどもを支える会 と
共催者　NGO ヨハネ・パウII世財団（エルサレム）は、
イスラエル・パレスチナ・日本の若者がつくる「平和の架け橋」2019プロジェクトの計画・実施に際し、
あらゆる面で温かくご支援、ご指導くださった下記の団体および個人、さらにすべての支援者の方々に対し、
心から感謝の意を表します。

独立行政法人 国際協力機構（JICA）
駐日イスラエル大使館　　駐日パレスチナ総代表部
公益財団法人 三菱UFJ国際財団
仙台教区カテドラル 元寺小路教会　仙台ドミニコの家　上西博（医師）　南相馬カリタス
仙台「平和七夕」、「心の港」とボランティアの方々
信州善光寺玄証院　長野市ボランティアセンターとボランティアの方々、ホストファミリーの方々
ハートネット桜枝町　聖パウロ修道会若葉修道院
カトリック吉祥寺教会　カトリック麹町教会
鈴木 信一師（聖パウロ修道会管区長）　加納 貞彦氏（早稲田大学名誉教授）　出川展恒氏（NHK 解説委員）
株式会社フランストラベルセンター

認定特定非営利活動法人 聖地のこどもを支える会
理事長　井上 弘子

ヨハネ・パウロII世財団（エルサレム）
理事長　イブラヒム・ファルタス神父（フランシスコ会）

GRATITUDES

CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION "HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND", Organizer,
JOHN PAUL II FOUNDATION(Jerusalem), Co-organizer of this Project
IISRAEL/PALESTINE/JAPAN "LET'S MAKE A PEACE BRIDGE 2019"
express their heartfelt gratitude to ALL THE SUPPORTERS AND COLLABORATORS,
especially,

JAPAN INTERNATIOAL COOPERATION AGENCY (JICA)
EMBASSY OF ISRAEL IN JAPAN, PERMANENT GENERAL MISSION OF PALESTINE IN JAPAN
MITSUBISHI UFJ FOUNDATION
CATHEDRAL OF SENDAI (MOTOTERAKOJI CHURCH), DOMINICAN HOUSE IN SENDAI
DR. HIROSHI UENISHI
PEACE TANABATA, HEART'S HOME AND VOLUNTEERS IN SENDAI CARITAS MINAMI-SOMA
GENSHO-IN, ZENKO-JI, VOLUNTEER CENTER OF NAGANO, HEART-NET SAKURAE-CHO
HOST FAMILIES IN NAGANO
SOCIETY OF ST. PAUL, WAKABA CONVENT, CATHOLIC CHURCH OF KICHIJOJI, CATHOLIC CHURCH OF KOJIMACHI
REV. FR. SHINICHI SUZUKI (Provincial of St. Paul Society)
PROF. SADAHIKO KANO (Professor emeritus of Waseda University)
MR. NOBUHISA DEGAWA (NHK News Commentator)
FRANCE TRAVEL CENTER S.A.

for their most warmhearted and effective support for the realization of THE PROJECT.

CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION
"HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND"
President Hiroko INOUE

JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST
President Fr. Ibrahim FALTAS, ofm

1 「平和の架け橋 2019」主旨と概要

"LET'S MAKE A PEACE BRIDGE IN JAPAN 2019"
PURPOSE AND OVERVIEW

主旨

本事業は、イスラエル・パレスチナ・日本の若者の間に「平和の架け橋」を築き、彼らを将来の平和の担い手、平和構築のリーダーとして育成することを目的としている。彼らに、共同生活、対話、分かち合い、ボランティア活動を通し、「人間」「命」「平和」とは何かを考え、対立と敵対を乗り越え、相互受容と信頼のうちに友情の絆を結べる場を提供する。

概要

期日：イスラエル・パレスチナ人：8月6日～8月23日 -18日間-
日本人：8月7日～8月22日 -16日間-

グループ構成：年齢：18～26歳

イスラエル人	4名
パレスチナ人	3名
イスラエル国籍アラブ人	2名
日本人	3名
スタッフ	7名（日本人6名、パレスチナ人1名）

活動内容

1. 共同生活

紛争当事国と日本の若者が16日間の共同生活の中で、「平和共存」の可能性や、相互理解と相互受容の大切さを体験し、友情の絆を結ぶ。日本人はとくに、敵対国の若者たちの仲介役として、「どのように平和をつくるか」、「どのように信頼関係を醸成するか」について学ぶ。

2. 国際文化交流

仙台および長野の方々との国際文化交流、南相馬での原発事故や大震災についての学び、善光寺での仏教体験、ホームステイ。さらに高齢者のためのボランティア活動をとおして奉仕する心を養い、共に協力して働く喜びを味わう。

3. ワークショップと対話

仙台および長野での交流やボランティア活動の体験、とくにイスラエル・パレスチナ参加者の紛争体験を傾聴し、平和構築の具体的な「道」について考える。

4. プロジェクト成果の発信

仙台と長野と東京において一般市民のための国際文化交流イベントで、それぞれの伝統文化（音楽やダンスなど）を披露するとともに、自分たちの紛争の体験や希望のメッセージを発信し、平和のために働く決意を表明する。

2 総括
Summary of the Project

プロジェクトの総括

認定NPO法人　聖地のこどもを支える会　理事長　井上 弘子

はじめに

長年続くイスラエル・パレスチナ紛争は、ますます混迷の一途を辿っている。自国第一主義に翻弄される国際社会、イスラエル総選挙混乱とその後の組閣の難航、紛争当事者による直接交渉の欠如など、平和への道は全く不透明なものになっている。イスラエル社会はますます右傾化し、正しい情報の欠如から分離の壁の向こうのことには全く関心を持たない若者が増えている。他方、紛争の中で生まれ育ったパレスチナの青年たちは、困難な日常生活の中で将来に展望が開けず、自分のアイデンティティも希望の光も失いそうになっている。

そのような混沌とした行き詰まりの状況のなかでも、当法人は次世代を担う紛争当事国および日本の若者たちの力を信じ、彼らの純粋な心に平和への希望を呼び覚ます「種蒔き」としてのプロジェクトを今年も実施した。

それを可能にして下さった仙台、長野そして東京の多くの団体、支援者、ボランティアのご協力に心から感謝しながら、総括をしてみたい。（P.# 参照）

1. プロジェクト準備

理事会でのプロジェクト実施決定は昨年１１月、すぐさま現地共催団体および現地スタッフとの協力体制作りに入った。さらに助成金申請の作業にも取りかかった。

先ずはプログラム作り、「平和の働き人育成」という本プロジェクトの根本的な目標は変わらないが、プロジェクトの舞台は、仙台、長野と東京。「平和のメッセージ発信」とともに「相互理解と友情の育成」に重点を置いた。

資金調達に関しては、今年も多くの支援者からの寛大なご寄付と三菱ＵＦＪ国際財団からの助成金が主な財源だった。またプロジェクトの広報もかねて NHK 解説委員出川展恒氏に、「聖地・中東の今を知る」というタイトルで講演会２回をお願いした。

参加者選出については、イスラエル・パレスチナ側は例年よりも募集要項を早く公開したので、多くの応募者があり、比較的容易に決定することができた。しかし日本側の参加希望者は極端に少なく非常に難航した。特に男子学生は一人だけだった。最終的に選出したのは、パレスチナ人３名、イスラエル人４名、イスラエル国籍のアラブ人２名、日本人３名である。

事前研修：エルサレムでは日帰り研修を２回実施。プロジェクト目標の認識の徹底、文化の多様性を受け入れる準備、互いの親睦を目的とした。事前課題としていくつかのテーマを与えて研修の時に発表させ、日本の文化歴史に対する理解を深めるようにした。東京では１泊２日の事前研修を実施。上記と同様の目的の他、イスラエル・パレスチナ紛争の歴史や現状の把握に主眼を置いた事前研修となった。

＊　パレスチナ人の出国：イスラエル国籍を持たない者の日本入国ビザ取得は、毎年準備に手間はかかるが難しいことではない。しかしパレスチナ国籍の

者が来日するには、日本国ビザだけでなく、分離の壁を越えてイスラエル領土に入る許可、そしてテルアビブ空港を使用する許可が別々に必要となる。その許可は申請をどんなに早く出しても、実際には出発の前日、あるいは飛行機出発の数時間前に来ることがある！　今年もあるベツレヘム在住の参加者のために最後までハラハラさせられた。「生まれて初めて分離の壁の外に出る！」という彼女が空港に到着し、グループに合流できたのは、出発の数時間前だった。

その他個々の準備過程については、p .12の「事務局準備」をご覧いただきたい。

2. プロジェクト実施

「3カ国の若者たちの心に、平和の種を蒔き、平和のメッセンジャーを育成する」というプロジェクト本来の目的を達成するために、この2週間いろいろな種類の活動を行った。共同生活、ディスカッションや分かち合いなどのワークショップ、奉仕する心を養うボランティア活動、大震災の被害を学ぶ福島被災地1日フィールドワーク、文化の多様性と素晴らしさを学ぶ仙台七夕祭り、善光寺での仏教体験や盆踊り、ホームステイなどの異文化体験など。リーダー・ファシリテーターは、経験豊富な当法人現地スタッフのヤクーブ。さらに、この若者たちの生活や活動を陰で献身的に支えたスタッフの活躍も忘れてはならない。

プロジェクト実施の経過とその状況については、P.18を参照していただきたい。

ここでは、特にプロジェクトの目的達成のために重要だったいくつかの活動、1）共同生活　2）ワークショップ　3）国際交流イベント　4）ボランティア活動　5）日本文化体験　について、少し詳しくお話ししたい。

1）共同生活

仙台では街外れにある緑豊かな「ドミニコの家」が共同生活の場であった。シスター方の笑顔や仙台の方々の温かい支援のおかげで、初めて出会う3カ国の若者たちは順調に共同生活を始め、実り多い数日間を過ごすことができた。

長野の共同生活は、善光寺の玄証院。若者たちが、福島住職のご好意でここに泊めていただくようになってもう4年目になる。

どんなに愛し合う人同士でも生活を共にすれば、必ず問題や軋轢が生じる。ましてや人種も文化もメンテリティも異なる人々と、しかも紛争の相手とともに暮らせるものだろうか?

この共同生活はある意味「平和のラボラトリー」だった。日本家屋で、畳や布団の生活だから、プライバシーも制限される。時間厳守とうるさく言われる。スマホの使用は制限されて、好きな時に使えない。食事の準備と後片付け、掃除と洗濯など日常生活の不可欠の部分について当番制で、責任を持たされる。

最初は珍しくて新鮮だった共同生活も、仲間との密度の濃い関わり合いの中で、疲れも溜まり、忍耐も失われがちになる。しかしこんな小さな軋轢こそ、この若者たちの心の成長を促すきっかけになったのではないだろうか？　些細な問題をとおして、自分がどれほど自己中心的か、相手への理解や思いやりに欠ける者かを自覚した。だが次第に分かち合いや対話をとおし互いに心を開き、真摯に向き合うことができるようになった。こうして、若者たちは、たとえ「敵同士」でも、皆同じ人間として受けいれ合うならば「共に平和に生きる」ことは、決して不可能ではないと、肌で体験して確信が持てるようになった。これこそ当プロジェクトの共同生活の目的の一つである。

＊特別参加者

今回2人の小学生兄弟（3年生と6年生）がプロジェクトに「初参加」した。ボランティア・スタッフとして仙台・長野に同行した中山夫妻の子どもたちである。真っ直ぐな心を持ったこの子どもたちのおかげで、若者たちの心は和み、笑顔が絶えなかった。二人もまたダンスや歌、ボランティア活動などに積極的に参加した。彼らにとっても、3カ国の青年たちとともに過ごし、「小さな架け橋」となったこの2週間は貴重な体験だったと思う。将来平和のために働く人になることを大いに期待している。

2）ワークショップ

各地でのワークショップの内容は多彩であった。まずは、参加者同士、互いに知り合い、信頼を醸成するためのアイスブレーキングや、アイコンタクトゲームをした後、プロジェクトの「目的」を再認識し、共有した。その目的実現に向かってみんなで協力するためである。

次に紛争の原因や平和達成の方法についていろいろな角度からディスカッションをした。3つのグループに分かれて話し合ったり、次に全体で討論して、

さらに議論を深めたりした。

私たちは一つひとつの活動のあと、できるだけ振り返りと分かち合いを行った。足りなかった点、良かった点を話し合い、協力して一つのことを成し遂げる喜びを共有するためである。

参加者同士の心がさらに深く結ばれる意義深いひと時となったのは、仙台と長野で行った、「紛争の体験の分かち合い」だった。紛争の中で生まれ育った彼らは、それぞれ、心に深い傷を負っている。日本にいるからこそ、彼らは日頃抱えている不条理な悲しみや苦しみの体験を、「敵」に面と向かって心を開いて語ることができた。聴く側も「敵」の心の叫びを、驚きと尊敬と共感を持って受け止めることができた。若者たちは、「互いのことを知らなかったから、憎み合っていたのだ」と悟った。一方日本人の若者たちには、紛争の生々しい体験を、「友」となった当事者の口から直接聴くことは大きな衝撃であった。

さらに互いの理解と心の絆を深めることができたのは、もう一つの「分かち合い」である。それは「もしあなたが相手の立場だったら」というテーマで、互いに立場を変えて紛争について語り合った時だった。ある青年は兵役の任務中、西岸地区で夜中に民家を強制捜査していた時に見たパレスチナ婦人や子どもたちの恐怖に怯えた眼差しを思い出した。ある者は、自爆攻撃で最愛の息子が犠牲になってしまった母親の悲嘆にくれる姿が脳裏に浮かんだ。こうしてその人の立場に立ってその心の内を表現しようとした。涙ながらにとつとつと表現してみようと試みた。それは彼らにとって初めての、そして過酷な体験だった。

紛争に直接かかわっていない日本人学生たちの心も、すでに友となった若者たちの苦悩に激しく揺さぶられた。紛争の中にある人々の苦しみの深さをかいま見たからである。「仲介者」となることがどれほど必要か、またどれほど難しいかをひしひしと感じたにちがいない。

しかしその分かち合いのあと、若者たちの表情は一変していた。どの顔にも安堵と喜びと相手に対する尊敬があった。そして固いハグを交わし合ったのである。３カ国のこれほど多様性を持った若者たちが一つになった瞬間、プロジェクトの目的の一つが達成された瞬間であった。

3）国際文化交流

仙台と長野で行った国際交流イベントは、外部の方々と交わり、情報発信をするもっとも重要な機会となった。それぞれのお国自慢の歌やダンスを３カ国の青年たちがみんなですべてを習って披露、そして中東の手料理をとおして、市民の方々との心温まる交流をした。仙台ではヤクーブのパイプオルガンコンサート、外国人留学生のコーラスがあった。長野では地元のハンドベル・アンサンブル NAGANO の皆さんも出演して下さった。両会場ではさらに、若者たちは、ピースメッセンジャーとして、プロジェクト中に体験した「平和を生きる喜び」を語り、自国での紛争終結と平和達成への夢と希望を、ご出席の方々に語りかけた。またこれから国際社会で平和構築に貢献したい日本の若者たちの決意も聴いていただいた。最後には、誰でも踊れる盆踊りやフォークダンスで大いに盛りあがり、一体感を深めた。民族も文化も宗教もメンタリティーも世代もさまざまに異なる人々が、まさに「平和」のうちに一つとなって喜びを分かち合った。

4）ボランティア活動参加

仙台では、原爆禁止を訴える「仙台平和七夕」の皆さんとともに折り鶴のレイを道行く人々に配るボランティア活動をさせていただいた。長野での老人ホーム「ハートネット桜枝町」訪問は、歌やダンス、折り紙などによる、高齢者の方々とのとても心温まる交流のひと時であった。ことばは通じなくても、笑顔で心を通わせることができた。またボランティアセンターでのウィンドウ装飾は、自分たちの国の自然や、地理、文化などを創意工夫して表現し、美しく飾ることができたので、みんな満足だった。

5）日本文化体験

仙台七夕祭り　日本で初めての異文化体験。見たこともない美しい華やかな飾り付けに若者たちは目を見張り、興奮していた。

善光寺での仏教体験と盆踊り大会　清々しい早朝、若者たちは善光寺本堂でのお朝事に参加してその荘重さに感動し、また福島住職の案内に興味津々だった。夕方の盆踊り大会には男女全員ゆかた姿で参加。長野市民の皆さんと踊り続けて楽しい忘れがたい一時を過ごした。（ゆかたをご寄付くださった方々、着付けを手伝ってくださった方々に、心から感謝したい）。

ホームステイとおもてなし

長野市のいくつかのご家族が、今年もホストファミリーとなって若者たちを温かく迎えて下さった。丸一日を各ご家庭で過ごして、玄証院に戻って来た彼らの顔は喜びと感謝と満足感に溢れていた。交流の手段は、笑顔やジェスチャー、ことばや習慣の壁を越えて家族の方々や小さな子どもたちと思う存分楽しんだこの一日であった。日本の「おもてなし」を肌で感じた、生涯忘れがたい思い出になるにちがいない。

終わりに

今年も多くの皆様に支えられて、この小さな「平和の種蒔き」が終了した。3カ国の若者たちは、わずか2週間だったが、実に貴重な「平和共存」の体験をした。そして互いに固い友情の絆を結び、将来への確かな希望を胸にそれぞれの国へ帰っていった。解決の糸口が全く見出せない中東問題の中にあって、こんな小さな活動はもちろん大海の一滴にすぎない。しかしこの若者たちは、確かに「平和は可能だ」ということを自分の肌で感じ取ったし、「小さな平和の橋」を自分たちの間に築き上げたのを実感した。彼らの将来にとってこの体験は大きい。みんな口々にこの喜びと驚きの体験を「平和のメッセンジャー」として自分の家族や仲間や友人たちに伝えていきたいと言っていた。自分の身の回りから一歩ずつ小さな変化を起こしていきたいと。

日本人参加者にとってもこのプロジェクトで得た収穫は大きかった。紛争当事者の間に立って平和をつくるために「仲介者」になることがどれほど大切かを痛感し、将来何らかの形でずっと平和構築に関わって行く決心をしている。何よりも紛争で苦しむイスラエルとパレスチナは、自分の友がいる大切な国になった。「継続は力なり」という。この小さな一滴が集まればいつかは大きな海になるかも知れない。

2005年以来継続しているこの活動から巣立った若者たちは、すでにイスラエル・パレスチナで約120人、日本人は約130人いる。中には国連や赤十字などの国際機関で働く者、あるいはJICAの海外青年協力隊で世界の国々で人道支援のために働く者など、いろいろな分野で、国際平和に貢献している者もいる。当法人にとって大きな喜びであり慰めである。

彼らの心に蒔かれた小さな平和の種がしっかりと根付き、成長して豊かな実りをもたらしてくれることを心から願っている。

プロジェクト参加者の平和メッセージ

シャロン・バラク

平和は複雑です。実現はとても難しい。しかし私たちは平和への思いを伝えることで世界を変えられるという希望を抱いています。

このプロジェクトが始まる前、私たちは、対立しあう相手と会って対話をするなんて考えてもいませんでした。

しかし私たちは、一緒にゆかたを着て盆踊りを踊り、善光寺の「お朝事」（おあさじ）に参加したり、それぞれの生い立ちや中東での紛争について話し合ったりしました。

このプロジェクトを通じて、私たちは意見を交わし、相手の立場に立って物事を考えました。そして敵だと思っていた人が実は同じく苦しみ、そして同じく平和を望んでいると知ったのです。

こうして親睦を深める機会に恵まれ、私たちはとても幸せです。

私たちのように一つ屋根の下に暮らすことができれば、一つしかない中東の土地でも平和に共存できることでしょう。

ダリーヌ・ラマ

平和を作りあげることは、難しいことではありません。たとえちっぽけな一人、小さなコミュニティーでも変化を生むことができるのです。

私たちは今回このプロジェクトの中で、今までの経験や出身の違いにもかかわらず、友人となり、手を取り合い、共に笑い、悲しさも愛も共有してきました。休憩が必要な時はメンバー皆でお互いを枕にして寝たこともありました。私たちは今日まで、お互いの異なる文化を理解し価値観を見出そうとしてきたのです。

また、日本から自然に感謝して暮らすことや、コントロールできない災害の中でも愛や希望によって悲しみを乗り越え、平和に暮らしていくすべを学びました。自然と異なり、私たちは人間なので、人間の力を

コントロールすることができます。平和を作っていく人の一人としてより良い世の中を作るために、美しく力強い絆を作りあげることができるはずです。また、それは私たち自身が少しずつでも平和の輪を広げていけると信じることで可能になります。

私たちは、愛と希望と私たちの心にある平和によって、「平和の架け橋」を作ることができると証明するためにここにいるのです。

私たちを支えて下さる皆様、本当にありがとうございます。

マラック・キナニ

２週間前私たちが初めて空港で会った時、私たちは全くの他人であり、これからどんなことが起こるのか、分かりませんでした。しかしこの2週間、プロジェクトで素晴らしい大冒険が私たちを待ち受けていることだけは確信していました。

毎日私たちパレスチナ人、イスラエル人と日本人は、同じ部屋で寝て、同じ食事を食べて、一つ屋根の下で生活を共にし、様々なアクティビティをとおして、お互いのことを理解し、絆を深めることができました。そして最も重要だったのは、紛争に対するお互いの考えを率直に共有することができたことです。それぞれの経験や政治的な視点、周りの環境の影響などたくさんのことを議論しました。時には対立し感情をぶつけあうこともありましたが、何よりもお互いのことを深く理解することができました。

三つの全く違うところから来た若者たちが、一緒にダンスや歌を楽しみ、喜びも悲しみも分かち合う。イスラエルとパレスチナでは今も紛争が続き、分離の壁を挟んで人々が憎みあっていますが、私たちが経験したことすべては、私たちに壊せない壁はないのだという希望を与えてくれました。

あと数日で私たちは故郷に帰ります。私たち若者には、社会に影響を与え、変化をもたらす力があることを信じて。もしみんなが自分の体験を話し分かち合う機会を持つことができれば、私たちはさらに一致して共存できるレベルにまで達することができるでしょう。こうして私たちの間にある違いを受け入れることができるのです。それまでは敵だと思っていた相手との対話をとおして、今では私たちの心は一つに団結していると感じています。またたとえ相手との違いを強く感じても、相手の心に寄り添って考え、違いを受け入れることができるようになりました。

私たちの世代は、私たちの親の世代より広い視野と平和への強い願いと相手を分かろうとする心を持っています。

ともに自分たちを作り上げていくこのプロジェクトのような機会を私たちに下さり、常に平和への希望を探し求めるように励まして下さる皆様に感謝いたします。

福島被災地フィールドトリップで、
シスターの説明を聴く

3 準備
Preparations

1. 準備（日本とイスラエル・パレスチナで）

実施月	項　目	準備活動の概略
1月	プロジェクト実施決定	理事会において「平和の架け橋2019」実施を決定。共催団体は例年のとおり、ヨハネ・パウロ2世財団（JOHN PAULL II FOUNDATION）。今年は、仙台、長野と東京での共同生活、対話、国際文化交流とボランティア活動、とくに参加者同士の友情の醸成と平和のメッセージ発信に重点を置く。
4～5月	協賛・後援の申請と承認	JICA、駐日イスラエル大使館、駐日パレスチナ総代表部
4月～5月	宿泊・セミナールーム・交流会会場などの予約	仙台ドミニコの家および信州善光寺玄証院の宿泊許可。仙台元寺小路教会（パイプオルガン・コンサートと国際交流イベント会場）、長野ボランティアセンターのホール（国際交流イベント会場）およびセミナールーム予約。 JICA東京国際センター（8月14日～21日）：宿泊、セミナールームなどの予約。 仙台平和七夕参加、南相馬被災地見学などの調整。
1月～8月	支援金募集助成金申請	支援募集のポスター、チラシを作成。支援者や各支援団体へ送付。 数団体に助成金を申請。当NPOに理解ある方に推薦状を依頼。 三菱UFJ国際財団から70万円の助成金交付決定。
2～6月	イスラエル・パレスチナ・日本の参加者募集と選定	インターネット、口コミなどで、参加学生募集。 現地共催団体「ヨハネ・パウロ2世財団」と共に、イスラエル・パレスチナからの参加者(9名)を選定、日本の学生（3名）も書類審査、面接を経て選定。
4～7月	交通手段の準備	イスラエル・パレスチナ人のための航空券購入。 国内交通手段も確保（成田空港～仙台、仙台～長野の専用バス予約、長野～新宿の路線バス切符購入、現地でのレンタカー予約など）
6月～7月	VISA手続き	パレスチナ人の日本入国ビザを取得するための各種書類作成、エルサレムへ送付。テルアビブの日本大使館へビザ申請、受け取りのために現地スタッフが数回訪問。
6月23～24日	事前研修（日本）	JICA東京国際センターにおいて、日本人参加者のために、イスラエル・パレスチナ紛争および平和構築に関する理解を促進するための事前研修を実施。
6月30日・7月7日	事前研修（イスラエル・パレスチナ）	イスラエル・パレスチナ参加者のために、エルサレムにおいて事前研修を2回実施した。プロジェクトの目的を再確認し、参加者同士の親睦を深め、また日本の国と文化を理解するためである。
7月14日	チャリティー・イベント	資金調達と広報のために、出川展恒氏（NHK解説委員）による講演会 7／14吉祥寺教会と聖イグナチオ教会で同日2回開催。 （いずれも参加者は約80名）
7月中旬～8月上旬	直前準備	食料品、医療品、雑貨など、活動に必要なものを購入し、長野の玄証院に送付した。Tシャツ、旅のしおり、名札などを作成。

2. 日本人参加者のための事前研修

2019 年 6 月 22 日（土）～ 23 日（日）、JICA 東京国際研修センターにて、日本人参加者のための事前研修を行った。イスラエル・パレスチナ紛争の歴史と現状、平和達成の展望について理解を深めてもらうためである。日本人参加者は 3 名だが、1 名は事前研修後に参加が決定したため、2 名で研修を行った。

1日目は、代表の井上が、このプロジェクトが発足したきっかけと目的についての説明をした後、参加者同士の自己紹介とワークショップを実施した。

午後には、事前課題としてイスラエル・パレスチナ問題について調べたことを各々発表した。発表内容は、下記の2テーマ

・入植地問題（高橋）
・エルサレム帰属問題（大村）

2日目は、仙台・長野・東京での活動の紹介とワークショップをした。

最後に、参加者がプロジェクトへの意気込みとして、決意表明文を発表した。この勉強会は、プロジェクト参加者の「平和理解」を深めるためにも役立った。

ベツレヘムの分離壁に描かれた鳩。防弾チョッキを着ている。

3. エルサレムでの事前研修

イスラエル・パレスチナからの参加者のために、6月30日と7月7日、2回の日帰り研修がエルサレムで行われた。事前に各参加者に、来日準備の一環として、「日本」についていろいろな角度から理解できるように、当事務局が提案した多岐にわたるテーマの中から、各自興味があるものを選んで、調べ、研修当日に発表できるように準備してもらった。テーマは次の通り。

1. 日本の歴史（歴史年表を作る）
2. 日本の地理と自然の美しさ
3. 日本の文化とその特徴
4. 日本の経済について
5. 日本の政治システム
6. 外国人が驚く日本の風習や礼儀作法
7. ヒロシマとナガサキについて
8. 東日本大震災と大津波について
9. 日本の皇室について
10. 日本人の宗教について
11. 日本国憲法第9条について

ファシリテーター：ヤクーブ・ガザウィ（現地スタッフ）
日程：　6月30日（日）、7月7日（日）いずれも9時30分から16時まで
会場：エルサレム旧市街のテラ・サンクタ学院
内容：自己紹介、アイスブレーキングゲーム、プロジェクトの説明（目的、プログラム、持ち物、行いの規律など）、ダンスの練習（ダブケ、フォークダンス、そうらん節）、日本についての学び（各自準備したプレゼンテーションをもとに）

この2回の研修をとおして、参加者たちは、プロジェクト経験豊富なファシリテーター、ヤクーブ・ガザウィ（現地スタッフ）の説明を聞いて安心した。そして初めてイスラエル人・パレスチナ人の「友」ができたことを喜び、憧れの日本で共にする「平和の冒険の旅」への期待に胸を膨らませて帰宅した。

南中ソーラン節の練習。

4. プロジェクト支援イベント

講演会『聖地・中東の今を知る』
出川展恒氏（NHK 解説委員）

ＮＨＫの出川展恒解説委員による講演会が7月14日（日）、今年はカトリック吉祥寺教会と聖イグナチオ教会の２か所で開かれました。イスラエルの総選挙とイラン核合意をテーマにした講演の要旨は以下の通りです。

1. イスラエル総選挙とパレスチナ問題

イスラエルでは4月9日に総選挙が実施され、パレスチナやイランに対し強硬路線をとってきた現職のネタニヤフ首相の与党「リクード」と、軍の元参謀総長らが立ち上げた新しい統一会派「青と白」の間で大接戦となりました。両者は同じ議席数で並び、その時点で右派・宗教政党の支持を得て優勢なネタニヤフ首相の続投が確実と見られました。ところがネタニヤフ氏は新しい連立内閣の樹立に失敗し、９月に改めて議会選挙をやり直すという異例の事態となりました。このことが中東情勢にどう影響するかを考えます。

中東和平・パレスチナ問題の解決は、なぜ重要なのか

パレスチナ問題は中東の多くの問題と深くつながっていて、この問題が解決されない限り、中東に平和と安定が訪れることはありません。1948 年のイスラエル建国後、パレスチナ人の多くが難民となり、あるいはイスラエルの占領下に置かれてきた彼らの苦悩は、70 年続いてきたわけです。長い対立・抗争を経て 93 年9月、「パレスチナ暫定自治合意」（通称、オスロ合意）が調印されました。その最終的な目標は、パレスチナ人の独立国家をつくり、イスラエルと平和共存させること。すなわち「２国家解決」です。ところが、双方の暴力や不信感によって和平交渉は度々中断し、今も中断したままです。もし中東和平交渉が完全に崩壊すると、話し合いによるパレスチナ問題の解決は不可能となり、暴力が暴力を、報復が報復を呼んで周辺地域や世界各国を巻き込んだ形で紛争が拡大し、止められなくなる危険性が高いのです。

右派政権継続か政権交代かが問われた選挙

イスラエルで通算４期 13 年首相を務めてきたネタニヤフ氏の、選挙戦のライバルはガンツ元軍参謀総長でした。イスラエルでは安全保障が最大の関心事で、軍を取りまとめられる人物への信頼は厚く、軍のトップが政界に出ることは珍しくありません。ガンツ氏は、ネタニヤフ氏が汚職疑惑で捜査を受けていることを批判し長期政権に終止符を打つべきだと主張。さらに、強硬一辺倒のネタニヤフ政権のもとではパレスチナとの和平交渉が完全に頓挫し、将来にわたって国の安全が確保できないとして、和平交渉を再開すべきだと訴えました。

これに対しネタニヤフ氏は、トランプ米大統領が米大使館をエルサレムに移し、エルサレムを首都とするイスラエルの主張を認めたこと、シリアから奪ったゴラン高原をイスラエル領と認めたこと、また、イラン核合意から離脱したことを、すべて自分とトランプ氏との信頼関係がもたらしたとし、自分だけがイスラエルを守れると主張しました。

事前の世論調査では、リクードは劣勢と見られていました。それが、トランプ大統領の援護で盛り返したのです。また、ヨルダン川西岸のユダヤ人入植地をイスラエル領にする方針を示して極右票の取り込みを図ったほか、ガンツ氏を「パレスチナに対し弱腰」とするネガティブキャンペーンを展開しました。

※聖地エルサレムの帰属問題：エルサレムは 1967 年の第３次中東戦争でイスラエルが占領し、パレスチナ人居住地区の東エルサレムも含めて一方的に併合を宣言しました。パレスチナ側は東エルサレムを「将来のパレスチナ国家の首都」と主張し、「イスラエルは国際法に違反して占領を続けている」と非難しています。また、そこに含まれる旧市街は諸宗教の聖地の混在地であり、占領は様々なアイデンティティーを刺激して和平交渉を崩壊させかねません。トランプ大統領が去年、エルサレムをイスラエルの首都と認め、米大使館をテルアビブからエルサレムに移したのは、

自らの再選戦略、つまり、自分の支持基盤であるキリスト教福音派の人たちを喜ばせて、支持固めを図ろうという意図が読み取れるのです。

※ゴラン高原の主権問題：元はシリア領だったゴラン高原はイスラエルの国土を見下ろす戦略上の要地で、イスラエルが第３次中東戦争で占領し、81 年に一方的に併合を宣言しました。国際社会は、ゴラン高原からの撤退をイスラエルに要求してきましたが、トランプ大統領は今年３月、ゴラン高原に対するイスラエルの主権を認める宣言に署名してしまったのです。背景にはシリアの内戦があります。アサド政権を支援するイランがシリアに派遣した革命防衛隊などの軍事組織が、ゴラン高原の近くでも活動しイスラエル軍との武力衝突も起きています。イランを最大の脅威と見るネタニヤフ政権は、ゴラン高原に対するイスラエルの主権を認めるよう、トランプ政権に働きかけてきました。

「ネタニヤフ首相続投へ」が一転、再選挙へ

開票結果では、ネタニヤフ氏が党首のリクードと中道統一会派の青と白が 35 議席で並びました。とはいえ、多数の党派が乱立し組閣には連立が不可欠な中、ネタニヤフ政権の連立仲間である右派と宗教政党を合わせた議席が 65 になり国会の全議席 120 の過半数を占めるため、ネタニヤフ首相の続投が有力となったのです。実際に大統領が組閣を指示したのはネタニヤフ氏でした。ところが、対パレスチナ強硬派の極右政党イスラエル我が家の党首が、厳格なユダヤ教信奉者の神学生の兵役免除を許さないとする法案を強く主張。これに反発する宗教政党との調整ができず、どちらの政党が抜けても過半数を確保できないという状況のまま、組閣期限の５月 29 日を迎えてしまったのです。

結局、国会は自ら解散する法案を採択し、９月 17 日に再選挙と決まりました。

再選挙後のパレスチナ問題の行方

アメリカのトランプ大統領は 11 月にも、パレスチナ問題の独自の解決案を発表するとみられています。娘婿でユダヤ教徒のクシュナー上級顧問が作成した案は、２国家共存にこだわらずパレスチナ自治の継続を考え、アラブ産油国などの巨額の援助で経済の自立を支えるというもののようです。パレスチナ側が「占領の正当化でしかない」と反発するのも当然です。

パワーポイントも用いて講演する出川氏（カトリック吉祥寺教会にて）

やり直し総選挙の結果を予測するのは難しいものの、イスラエル社会の右傾化を反映して、結果はあまり変わらないかもしれません。再びネタニヤフ政権となれば、極右政党の支持をつなぎとめるためにユダヤ人入植地のイスラエル併合などを約束することも考えられます。入植地はヨルダン川西岸に 140 カ所もあり、それだけの土地を失えばパレスチナ国家の可能性はなくなり、パレスチナ人の大規模な抗議行動や武力衝突につながる危険性もあります。

２. 危機に立つイラン核合意と ペルシャ湾情勢

イラン政府は７月７日、ウランの濃縮度を合意で決められた制限を超えて引き上げると発表しました。アメリカが制裁を強化して合意を破ったのだから、イランも合意を順守しないと、対抗措置に踏み切ったのです。中東地域での核不拡散と緊張緩和に寄与するはずだった核合意の、存続が危ぶまれる事態となっています。

核合意は 2015 年７月、イランがアメリカなど６カ国と結びました。イランが核開発を大幅に制限する見返りに欧米による経済制裁を解除するというもので、ウラン濃縮度を 3.67％以下に抑えるというのがポイント。核分裂を起こすウラン 235 を遠心分離機で濃縮する場合、３～５％なら原発の核燃料用の範囲内ですが、イランが「医療用」として目指していた 20％まで引き上げる技術を得ると、核兵器に利用で

きる90%まで高度化するのが容易になるといいます。

トランプ大統領は「合意の期限が切れればイランは核兵器開発する。欠陥だらけの合意だ」として去年5月に合意を破棄し、イランからの原油輸入禁止などの経済制裁を発動しました。イランの対応は、国内の対外強硬派からの突き上げがあり対抗策をとらざるを得ない一方で、濃縮度の引き上げは核s開発を疑われない範囲にして経済面での見返りを期待する、という瀬戸際外交です。

しかし、十分な見返りは期待できず、かといって相手が合意を守らない、つまり制裁を解除しないのに、自分たちだけ守ることはできないという危機的状況。イラン危機は、原油輸送の要路ホルムズ海峡の危険という、日本にとっても死活問題を意味します。現にタンカー被害やイランによる米軍の無人偵察機撃墜という、一触即発の情勢です。日本をはじめ国際社会は核合意を崩壊させないよう、イラン経済を支える方策を考えるべきだと思います。

出川展恒（でがわ・のぶひさ）
1985年、NHK入局。91～92年テヘラン、94～98年エルサレム、2002～06年カイロの各支局長を経て06年7月から中東・アフリカ・イスラム地域担当の解説委員を務める。

2019年11月3日　THE CATHOLIC W

わすれない

復興支援の現場から

福島・南相馬

週一度、カリタス南相馬に伺って

現在、私は福島県相馬市内の病院に勤務しながら、南相馬市立病院（福島）へ内視鏡検査医としてサポートに行っています。2011年3月11日の震災発生時には相馬市の病院に勤務していて災害を経験し、被災者の一人となりました。

カリタス南相馬には、南相馬の病院へ行く前日の月曜日に週1回お伺いして、自分自身もお世話になっております。カリタスでは全国から来られたボランティアの方々にお会いしたり、お話ししたりする中で、常に何か得るものがあります。

ボランティアのやり方は人それぞれですが、私の場合はカリタススタッフの健康相談、相馬野馬追い祭りのみこし担ぎのピンチヒッターなどを経験しました。今年の夏は日本だけでなく、パレスチナやイスラエルの若人と会う機会にも恵まれました。彼らには被災地を訪問し、被災者の話を聞いたり、語り合う時間が設けられています。現地の生の声を聞くことで現状を深く知り、報道などでは分からない多くの学びがあるようです。

（福島県の太平洋沿岸（通称・浜通り）では、まだまだ継続し、やらなければならない支援がたくさんあります。今後も若い人たちの積極的なボランティア参加を希望し、新たな出会いがあることを期待しています。また、彼らの心の土にまかれた種が、将来どのように成長していくか楽しみにしています。

相馬中央病院消化器内科
医師　上西　博

全国から来たボランティアの青年たち

カトリック新聞2019年11月3日号に掲載された、上西博先生の記事。上西先生は当法人の支援者でもあり、今回の「福島被災地見学フィールド・トリップ」のためにご尽力いただいた。

城　13版S　2019年（令和元年）8月30日（金）　朝日

イスラエルとパレスチナの若者 被災地に

紛争・震災「心に傷」 命の大切さ語らう

長く対立状態にあるイスラエルとパレスチナに住む若者たちが8月、日本の若者とともに仙台市や福島県などの被災地を訪れた。紛争と震災。ともに理不尽に命が奪われた経験を知る人同士が交流して、命や対話の大切さを学ぶ試みだ。

認定NPO法人「聖地のこどもを支える会」（東京都）が2005年から続けるプロジェクトで、日常では交流の機会が少ないイスラエルとパレスチナの若者が、日本人も交えて対話を重ね、互いを尊重し合う心を学ぶ目的だ。当初は広島などを訪ねたが、震災の半年後には仙台や塩釜でボランティア活動を始め、岩手県大槌町でも復興支援や仮設住宅訪問などで住民と交流してきた。

今回は約15人が参加し、7～11日に福島県南相馬市などで帰還困難区域を見学し、現地のシスターらから被害について学んだ。仙台市青葉区のカトリック元寺小路教会では、メンバーが平和や命に対する思いを発表し、ダンスや食事会で仙台の人たちと交流を楽しんだ。

05年から参加するパレスチナのヤクーブ・ガザウィさん(30)は、「震災も紛争も心に大きな傷を残す。どんな人でも誰かにとって大切な存在で、簡単に奪われてはならないと学んできた」。イスラエルで兵役を経験したマタン・マスラウィさん(23)は「パレスチナの人と友人になり、向き合う経験は初めて。日本では震災で多くの人が亡くなったが、私たちの国では憎しみで命が失われている。自然災害とは違い、対話で救える命だと感じた」と交流を振り返った。

井上弘子理事長(80)は、「まずは同じ人間として仲良くなれる体験をし、心に平和の種を持ち続けて、花を咲かせてほしい」と話した。（川野由起）

地元の人たちとともに、盆踊りを踊る参加者ら＝仙台市青葉区

仙台国際交流会の後、朝日新聞宮城版に掲載された記事。これを書いた記者、川野由起は本NPOの「平和の架け橋プロジェクト」およびスタディー・ツアーの経験者。

4 プロジェクトの経過
Daily Report of the Project

まとめ　ヤクーブ・ガザウィ／井上弘子

第1部　仙台での活動　8月7日（水）～11日（日）

8月7日（水）

成田空港到着：昼過ぎイスラエル・パレスチナからの参加者9名が、リーダーのヤクーブ・ガザウィとともに成田空港到着、出迎えに来た日本人参加者およびスタッフの歓迎を受けた。
成田から仙台へ移動（貸切バス）　車中で自己紹介やアイスブレーキングなどの活動を行い、また各自このプロジェクトへの期待などについて話し合った。
仙台到着：夜２１時30分、宿泊所《ドミニコの家》にチェックイン。

8月8日（木）

＊イスラエル人・パレスチナ人・日本人（計12人）を4人ずつ3つの小グループに分け、活動や共同生活の小単位とした。
午前：オリエンテーションとアイスブレーキング　共同生活や活動についての説明。自己紹介、アイスブレーキングゲーム。
ワークショップ　「友情」と「平和」をテーマに「Myうちわ作り」：両面真っ白なうちわに、各自それぞれのイメージを描いた。
午後：アクティビティ　「平和のMyうちわ」を持って仙台七夕祭り参加　特に核兵器廃絶のために長年続けておられる方のおかげで「平和七夕」に参加させていただいた。日本各地や世界中から送られてくる折り鶴で作られたレイを祭りに来た人々に配るボランティア活動は、参加者の心に非常に強いインパクトがあった。
その後、フリータイム　ボランティアの方々に助けられて、仙台市内散策。

8月9日（金）

終日：アクティビティ「福島被災地見学フィールドワーク」
カリタス南相馬のご協力により、大震災および原発事故の被災地を訪問。東京電力が建設した原子炉事故に関する資料館を見学し、避難を余儀なくされた住民の方々の苦しみに思いを馳せる。
夕刻：ワークショップ　ドミニコの家に帰り、前日と当日の体験の分かち合いをした。

8月10日（土）

午前：ワークショップ　「紛争」についての分かち合い。まず各自が個人的に抱えている「苦しみ」について、またイスラエル・パレスチナ紛争の中で各自が体験した、あるいは体験している苦しみや不条理さについて、心を開いて話し合った。先ずは小さいグループで、次に全体で分かち合いとディスカッション。
午後：ワークショップ　翌日の「国際交流イベント」で発表する平和のメッセージ、および「聖地紹介」のプレゼンテーション（パワーポイント）を各グループで作成。
夕刻および夕食後：アクティビティ　ダンス（ダブケ・フォークダンス・そうらん節）の練習。「花は咲く」の歌唱練習および「平和のメッセージ」発表の練習。
翌日のイベントの料理を準備。

8月11日（日）

早朝：仙台市中心部の元寺小路教会へ出発。国際文化交流イベントのための会場準備
午前～午後：国際文化交流イベント

仙台国際交流会で行われた、オルガンコンサート。演奏後、喝采にこたえるヤクーブ・ガザウィ。（エルサレム聖墳墓教会首席オルガニスト）

プログラム：

1）ヤクーブのオルガンコンサート

2）ランチタイム　中東料理（シュワルマ、サラダ、アラビック・コーヒー）を提供。

3）文化交流イベント　それぞれの国の伝統的なダンス、歌、などで楽しい一時を過ごした。最後にみんなでイスラエルフォークダンス「マイム・マイム」や、盆踊りを踊って締めくくった。仙台市民の他、仙台在住の外国人青年など、総勢約 70 名が参加。

夕刻：フリータイム　ボランティアの方々に助けられて、仙台市内散策。

第2部　長野での活動　8月12日（月）～18日（日）

8月12日（月）

早朝：仙台から長野へ移動　バスで長野へ出発。約6時間のバス旅で、さらに親睦を深めるための種々の活動を行った。仙台での体験の分かち合いやディスカッション、絆ゲーム、歌唱練習など。途中、猪苗代湖など2箇所でショート観光。

夕刻：長野到着。宿泊先の善光寺玄証院にチェックイン。玄証院での共同生活や活動についてのオリエンテーション、および周辺の説明。

8月13日（火）

午前：ボランティア・センターへ移動。セミナールームをお借りして、長野での活動開始。

ワークショップ　テーマ：「自分にとって紛争とは何を意味するか」「あなたの紛争の体験：個人的にどのような影響を受けているか」

午後：ワークショップ　アイコンタクトゲーム：2人ずつ一組になって、真っ正面から目と目を合わせて向き合うことによって、互いの理解、信頼、受容の関係を生み出すことを目的とする。

アクティビティ　ストレッチ体操のあと、イベントで披露するすべてのダンスや歌などの練習：ダブケ（アラブ）、ボラ・ボラ（イスラエル）、「そうらん節」、「花は咲く」、「炭坑節」（日本）

夕刻：フリータイム

8月14日（水）

午前：ボランティア活動　センターからの依頼を受け、1階の広いガラス窓を、イスラエル・パレスチナの文化や伝統を表すデコレーションで飾る準備。それぞれのアイデアを出し合い、力を合わせて制作した楽しい時間だった。

午後：ボランティア活動　ハートネット桜枝町ホーム訪問。イスラエル・パレスチナを紹介する短いプレゼンテーション。3カ国の青年たちが一緒にそうらん節や盆踊りを踊り、「花は咲く」を歌った。そのあと通訳を交えてお年寄りの方々と楽しいおしゃべりの一時を過ごした。

夕刻：アクティビティ　ゆかた姿で善光寺恒例の盆踊りに参加。ゆかたの着付けは長野の2人のボランティア女性に手伝っていただいた。日本の情緒を満喫した。

8月15日（木）

午前：アクティビティ　戸隠高原の戸隠神社奥社までハイキング。

午後：飯綱高原でバーベキュー。

夕刻：ワークショップ　前日のお年寄りとのふれ合いの一時、盆踊り参加、当日のハイキングやバーベキューについて感想の分かち合い。

飯綱高原でのバーベキュー。

8月16日（金）

早朝：アクティビティ　4時30分に起床。善光寺の本堂で、朝のお勤め(お朝事）に参加。本堂の見学。初めての仏教体験のインパクトは非常に大きかった。

午前：ボランティア活動　ボランティアセンターで、前々日に始めた窓のデコレーションを完成。みんなの共同作業の結果は、「創造性が素晴らしい」とセンターの職員の方々に大変喜ばれ、感謝された。

ワークショップ　日本人参加者の一人が監督・製作した映画《先祖たちの記憶》（戦争を知らない日本とミャンマー（ビルマ）の青年たちが、第二次世界大戦の記憶を探す旅）を鑑賞。その後、戦争の悲劇や憎しみや赦しについての分かち合い。ディスカッション。

午後：ワークショップ　《もしあなたが相手の立場だったら?》、分かち合いとディスカッション。イスラエル人がパレスチナ人になり、パレスチナ人がイスラエル人の立場に立って、紛争の中で何を思い何を感じるか、どう行動するかを話し合った。中には激しく心を動かされて泣き出す者もいた。感動的なワークショップとなった。

8月17日（土）

午前：アクティビティ　イベントの準備　ボランティアセンターで、イベント会場となるホールをみんなで準備。披露するすべてのダンスと歌の最終練習。また前日のワークショップ経験に基づいて平和のメッセージの修正。それぞれの国のメッセージとしてではなく、3カ国の青年から成るグループからのメッセージとして発信することに。発表のリハーサル。

午後：国際交流イベント

プログラム

1）理事長挨拶・歓迎のことば

2）3カ国の参加者紹介

3）イスラエル・パレスチナの紹介（パワーポイント）

4）平和のメッセージ発信

5）ゲスト出演のハンドベル・アンサンブルNAGANOの演奏（ご来場の方々も演奏に巻き込んだ楽しい一時だった。）

6）3カ国の伝統ダンス（ダブケ、ボラボラ、南中ソー

ラン節）と歌「花は咲く」（日本語、ヘブライ語、アラビア語、英語）。3つのダンスと歌をすべてのメンバーが一生懸命練習し披露した！
7）ヤクーブ（パレスチナ）、オール（イスラエル）、喜祈（よしき）少年（日本）によるピアノ3連弾即興曲
8）中東料理（軽食）「シュワルマ」、「ファトゥーシュ・サラダ」、「ファラフェル」など。
9）炭坑節とフォークダンスをみんなで。
夕刻：ホームステイ　イベント後それぞれのホスト・ファミリーに迎えに来ていただき、翌日の夕刻まで丸1日、日本の家庭生活を体験。
日本人は玄証院へ。

8月18日（日）

午前〜午後：イスラエル人・パレスチナ人はホームステイ。日本人はスタッフとともに温泉へ。
午後：日本の家庭の思い出を胸に、全員玄証院へ帰る。
ワークショップ　前日のイベントのフィードバック、それぞれのホームステイの体験、感想の分かち合い。
夕刻〜夜：東京への出発準備　玄証院の清掃、整理、荷作り。

第3部　東京での活動　8月19日（月）〜22日（木）

8月19日（月）

午前：長野から東京へ移動　高速バスで長野出発。
午後：東京・新宿到着　JICA東京国際センターへチェックイン。JICA滞在のためのショートオリエンテーション。
ワークショップ　長野滞在全般についてのシェアリング。
午後〜夜：フリータイム　みんなでカラオケで思う存分歌い、初めての寿司に舌鼓、大都会東京でのフリータイムに大満足。

8月20日（火）

終日:フリータイム　二つのグループに分かれ、ディズニーシーとお台場のどちらかを選んで東京観光。お台場の、光と音楽と映像を融合させたミュージアム「チームラボ」は若者たちの心をわしづかみにしたようだ。

8月21日（水）

午前：ワークショップ　楽しかった東京フリータイムの体験、プロジェクト中にメンバー同士あるいはグループとしてどんなトラブルを体験したか、どのように解決したか、分かち合いとディスカッション。
午後：ワークショップ　ディスカッション「将来どのようにピースメーカーになれるか」。最後に信頼ゲームや絆ゲームをとおして、このプロジェクト中に育んだ友情の確認。プロジェクト全体についての総括。各自最終レポートを作成。

8月22日（木）

午前：ワークショップ　最後の分かち合い。各自にとって、このプロジェクトでつくることができたコミュニティについて話し合った。
午後：ショートフリータイム
帰国のために、成田空港へ。

8月23日（金）

早朝：テルアビブ、ベングリオン空港到着。

最初のアクティビティ、仙台での「My うちわ」作り。両面真っ白な
うちわに、それぞれ「平和」と「友情」のイメージを描いた。

仙台国際交流イベントで、「花は咲く」を日本語、ヘブライ語、アラビア語、
英語で歌う。若者も子どもも、知らないことばでも一生懸命！

仙台国際交流イベントで、「南中ソーラン」をみんなで踊った。
練習はハードだった！

みんな揃って食事風景（仙台ドミニコの家）

仙台平和七夕の「核兵器廃絶」を訴えて、折り鶴レ
イを配るボランティア活動に参加させていただいた。
（仙台七夕祭り）

福島被災地フィールドトリップで、福島の海（太平洋）
をバックに。

美しいゆかた姿で勢ぞろい。玄証院の前で。

アイコンタクトゲーム。互いの目を真剣に見つめ合うことによって、相手の心の内を読み取ることを学ぶ。

ゆ信頼ゲームの一つ。最初は輪になってイスに横向きに座り、一つずつイスを抜いていく。するとお互いが、お互いを支え合う、宙に浮いた人間の輪ができあがった。

長野国際交流イベントで、中東料理を提供。珍しいエキゾチックなお味をどうぞ！

提灯の明かりで、楽しい盆踊り。若者たちにとって夢のような一時だった。（信州善光寺の本堂前で）

長野国際交流イベントで。3 カ国の若者たちが、2 人の少年と、「南中ソーラン」を力一杯踊った。

ホームステイから「お帰りなさい！」 玄証院の前でホスト・ファミリーの方々と。

5 収支決算
Balance Sheet

プロジェクト会計報告（2018年4月～9月）
Project Financial Report （April - September 2018）

収入の部　Revenues

単位：円　Unit: ¥

費目 Items	摘要 Descriptions	金額 Amount	
支援金等 Contributions, etc.	一般寄付金 Private donation	2,049,993	4,136,535
	助成金　公益財団法人三菱ＵＦＪ国際財団 Subsidies by MITSUBISHI UFJ FOUNDATION	700,000	
	イベント収入（講演会） Seminar participation fees	84,802	
	参加費　学生、スタッフ、他 Project participation fees (students, staff)	1,301,740	
自己資金 Own funds			91,043
合計 Total			4,227,578

支出の部　Expenditures

単位：円　Unit: ¥

費目 Items		摘要 Descriptions	金額 Amount	
旅費 Travel expenses	国内旅費 Domestic travel expenses	交通費（列車、夜行バス、レンタカー他）、滞在費（宿泊費・食費など） Transportation (Bus & train fare, rent-a-car and other travel expenses), Accommodation (Lodging・Meals)	1,327,182	2,772,362
	海外旅費 Oversea travel expenses	航空券代　テルアビブ～成田 Roundtrip travel expenses Tel Aviv ～ Narita	1,445,180	
人件費 Personnel expenses		事務運営費、 イスラエル・パレスチナ事前準備費 Adminisrative expenses, Preparation in Israel / Palestine	507,200	765,287
		謝礼 Reward	258,087	
会議費 Conference expenses		施設使用料 Rental fee of seminar room & hall	180,000	240,000
		交流イベント Event fee in Sendai and Nagano	60,000	
印刷・複写・製本費 Print / Copy /Bookbinding		パンフレット・しおり、コピー、報告書作成 Leaflets, brochures and booklets, Making report book	37,814	37,814
通信・運搬費 Communications / Delivery		通信費・宅急便代、報告書発送 Communications / delivery, postage	127,100	127,100
消耗品費 Consumables		各種生活雑貨、Tシャツなど Groceries, T-Shirts etc.	160,553	160,553
雑費 Micellaneous expenses		振込手数料、その他 Bank transfer fees, Others	3,966	3,966
イベント費 Event expenses		講演会 Seminar expenses	120,496	120,496
合計 Total				4,227,578

6 参加者の声
Feedback from the Participants

青年参加者の声 Voices of the Young Participants

マタン・マスラウィ　Matan MASLAWI

イスラエル　23 歳　社会人

私は、３つの目標をもってこのプロジェクトに参加したが、それらを達成することができたと思っている。1つ目は、日本人と出会い、彼らの文化について学ぶこと。２つ目は紛争の反対側にいる人たちと出会って友だちになり、良い会話ができるようになること。３つ目は、個人的ではあるが、このプロジェクトを通じて、自分自身と将来について、自分は何になりたいのか、どのような人間になりたいのか、もっと学ぶことだった。

１つ目の目標は、プロジェクトに参加して割と簡単に達成することができた。仙台から福島、長野、そして東京へと、３名の日本人学生も一緒に旅する中で、日本の豊かな文化を期待以上に学ぶことができた。２つ目の目標ももちろん達成できた。毎日のように、紛争について話し合うことで、紛争の反対側にいる人たちと出会う機会が与えられた。共同生活を通じて、私たちは友だちになった。３つ目に関しては、まだ自分には学ばなくてはいけないことが多いこと、そしてこのプロジェクトが、自分のなりたい姿に近づく第一歩であることを悟った。

プロジェクトを経て、私の人生には、プロジェクト以前にはなかった二つの要素が加わった。それはもっと日本とその文化についてさらに探求すること、そして日々きちんと紛争と向き合い、私がいる小さなコミュニティからでも変化を起こしていけるよう努力することだ。私は、自分の将来が、このプロジェクトの経験と同じくらい有意義であることを願っており、このような機会にもっと参加していければ嬉しい。もっと自分自身の成長のために努力したい。もはや、日本と紛争が自分の人生の一部でないと言い切ることはできない。

プロジェクトで、希望や平和についてたくさん話してから、「平和」という言葉が奇妙に思えてきた。もう「平和」とはどのようなものなのか、それを達成する正しい道は何か、よく分からない。ただ、私は時々プロジェクトにおける一瞬一瞬を思いだす。例えば、盆踊りで踊っていた時、カラオケで歌っていた時、一緒に料理していた時、さらにみんなで昼寝をしていた時（私はパレスチナ人の友だちの体の上に頭を乗せていて、日本人の友だちは私の上に頭を乗せていた）。そして、こんな何気ない瞬間こそ「平和だ！」と感じた。現実もこれくらいシンプルだったらいいのに、と思う。

私の願いは、正直さと寛容さがあれば、平和は実はとてもシンプルなのだということを伝えることだ。紛争の現実は確かに複雑だけれど、私はこのような平和のメッセンジャーになりたいと思う。

タル・ギロ　Tal GIRO

イスラエル　24 歳　社会人

プロジェクトが始まる前から、私は紛争に関する知識を持っていたが、紛争のどちら側が「正しい」のかという点については困惑していた。私は、もっといろいろな意見を聞き、パレスチナ人と会い、確固とした自分の意見を持ちたかった。紛争を生きている人々にとっては、これは重要な点だ。また日本のように中立的な国こそ、紛争について学ぶには最高の場所だと思った。

プロジェクトを経て、私は紛争について多くを学んだように感じる。私は、パレスチナ人を含めた素晴らしい人々と出会い、紛争の両側には実際に生きている人々がいるのだということ、そしてその両者が平和的に共存することは可能であるということを学んだ。

このプロジェクトはいくつかの点で役立った。

第一に、全く新しい文化と遭遇したことだ。この経験は、自分とは全く異なるタイプの人々ともうまくやっていけることを教えてくれた。また日本の文化は、ゼロからの再建が可能であることを教えてくれた(注:被災地での復興のこと)。つまり、私たちも、二つの国の間で破壊されてしまったものを、再び立て直すことができることを示唆している。

第二に、パレスチナ人と出会ったことである。紛争に関心を抱いている人たちにとって、パレスチナ人と会うことは、状況をよりよく把握するための第一歩だ。そうして初めて自分の意見を持つことができる。プロジェクトまでは、私にはパレスチナ人と会う機会はなかった。だから、この機会を得たときは本当に嬉しかった。

私は今後、家族、友人、そして周囲の人たちに対してのインフルエンサー（影響力のある人）になるつもりだ。それは、もう紛争の現実を無視して生きていくことができないからだ。私は、多くの人たちに、紛争の両側で傷つく人々がいること、そして解決策を見つけなくてはならないことを理解してほしい。

平和への道のりが長いことは理解している。でも同時に、どんなに小さな一歩でも解決へ近づくことができることも知っている。紛争の両側にいる人々が目を覚まし、この変革の一部になってくれることを願っている。

シャロン・バラク　Sharon BARAK

イスラエル　23 歳　社会人

日本で「平和の架け橋」を築く

日本に行くにあたり、私には三つのゴールがあった。第一に、自己理解を深め、自分に対してもっと寛容になること。第二に、オープンマインドになり、新しい友人を作り、楽しむこと。そして最後に、色々な人と出会い、体験談を聞くことである。

私は、この三つのゴールを達成できたと思っている。そしてこの経験は、自分がそれまで想像していたよりずっと素晴らしかった。私の期待を超えた。

このプロジェクトは、私をより忍耐強く、寛容な人間にしてくれた。私は、物事が自分の思いどおりに進まないと、ときどきすごく頑固になってしまう。また、自分が財布を失くし、そのあと携帯電話を失くしたときは、どう対応するかですごく苦労した。それでも、私はきちんと心配事を脇に置いて、集中してこの経験を切り抜けることができた。

このプロジェクトを通じて、私は集中力が高まり、

他の参加者とも、他のことに気を取られずに過ごすことができた。

このプロジェクトはまた、普段からなじみのないものも受け入れる姿勢を教えてくれた。例えば、日本やパレスチナの人々、宗教、儀式や社会的慣習などだ。

これらのことを受け入れるのは、初めは難しかったが、プロジェクトが終わるころには、異なる文化がそれぞれに美しさと神秘を持っていることに気づいた。

私にはたくさんやりたいことがあるので、将来がどうなっているか、はっきりしたことは言えない。近い将来に関しても、まだ自分は混乱している。

帰国後も、参加者同士でずっとつながっていたいと思っている。日本で培った考え方や感受性を忘れず、知識に対して貪欲でありたい。紛争、イスラエル、そして日常の出来事を、違った目で見ることができると思う。

私は、人間と人間関係をテーマにしたアートをつくり、それを通じて、人々の好奇心を呼び起こし、普通のことでも、もっとフレッシュな目で見てほしいと思う。

また、イスラエル国内外で行われる、このような平和プロジェクトに一つでも多く参加したい。

私は、日本で始まった平和と友情がこのあとも生き続け、育ち、他の人々をも巻き込むようになってほしい。人々が、自己中心性を捨て、他の人々の視点を受け入れ、みんなが住みやすい場所を作ることができることを願っている。

ダリーヌ・ラマ　Darine LAMA

パレスチナ　25歳　社会人

本プロジェクトには、ピースビルダー（平和をつくる人）として、色々な目標をもって臨んだ。主に、自分と他の参加者との違いを理解し、彼らのバックグラウンドを受け入れること、文化の違いを超えた絆を結ぶこと、そして自分の身の回りで起きていることについて理解を深め、他の参加者の話を聴くことで異なる視点を培うことである。

これらの目標は、プロジェクト参加を通じて果たされたと思う。プロジェクトでは自分が期待していたような経験ができた。例えば、他の参加者の経験を知り、身の回りの出来事についてより総合的な見方を得たことで、私自身の考え方が変わったり、新たな考えが生まれたりした。16日間の共同生活により、参加者間の新たな友情も生まれた。

どのような文脈であれ、一つの側面を知っているだけでは不十分である。このプロジェクトは、考え、視点、多くの情報を含んだストーリー（体験談）を互いに共有する機会を与えてくれた。ワークショップや対話の機会があるたびに、私の中にあった思い込みや既成概念が塗り替えられていくような感覚を覚えた。それは、本や新聞記事では得られないようなストーリー（体験談）を、参加者の口から聞いたからだった。このプロジェクトでは、知識の基礎となるようなものが培えたと思う。今後は、自分から他の人々のストーリーや経験を探しながら、知識をさらにつけていきたい。

将来的には、小さなことでも何か変化を起こせる人になりたい。どんなに小さな変化であっても、一歩に変わりはない。このプロジェクトを通じて、私は多くのことを学び、かつ様々な状況に対応できるようになった。忍耐すること、すべてを出し切ること、そして勤勉になること。また、知識や情報の共有によって自分を強めていけることも知った。私たちの周りにたとえ小さくても生きるに値する世界を作り上げるには、自分は何を与えられるのか、何を変えられるのか、何ができるのかを分かるまでには時間がかかるだろう。

近くにいる人を愛してほしい。愛すること、望むこと、与えることは、なんでも成し遂げる大きなパワーとなる。私たちにできることはたくさんあると信じている。愛を日々分かち合うことで、幸福、共感、喜び、そして内なる平和を周りに広めていきたい。いつか私たちが夢見る世界にたどり着くために。このプロジェクトは、その愛を分かち合う第一歩に過ぎない。

オール・ガダ　Orr GADA

イスラエル　23 歳　社会人

私が平和の架け橋プロジェクトを知ったのは偶然からだった。数年前に参加した友人が、応募するように勧めてくれたのだ。私の家族、友人、そして私自身は平和を信じているが、これまでパレスチナ人と交流したことはなかった。それ故、このプロジェクト参加の動機は、イスラエル・パレスチナ紛争をより深く知りたいという望みであり、さらに周囲に影響を与えるためにユニークで特別な機会となるかも知れないと思ったからである。

私にとって紛争に関する学びは、まさにイスラエルのテルアビブ空港で始まった。イスラエル人参加者はみんな、出国審査を早く抜けたが、パレスチナ人参加者はフライトに遅れそうになるくらいセキュリティ・チェックで止められてしまったのだ。イスラエル人として、私はこのような経験をしたことがなかった。

15 時間のフライトの末、東京に到着。そこからバスで仙台へ向かった。このプロジェクトは、仙台、長野、東京の三都市で行われた。

仙台への移動中、私たちは津波と、それが人々の生活へもたらした影響について学んだ。私の印象に残った二つのアクティビティは、七夕祭りでのボランティアと、福島被災地のツアーだった。私は、日本の人々が、災害を記憶にとどめながらも前に進み、悲劇から立ち上がり、復興しようとしていることに感動した。

仙台から、長野へ移った。長野での滞在中、善光寺での朝の祈りに参加し、また夏祭りにも参加した。神社も訪れ、異なる祈りを体験した。その後、日本人の家庭にお世話になるすばらしい経験もできた。この経験により、日本の文化について理解を深めることができた。

東京に到着すると、そこでもカラオケなど、とても豊かでユニークな日本文化を体験できた。

全体を通じて、平和の架け橋プロジェクトは、イスラエル・パレスチナ紛争を誠実に語り合うための、安全で、価値判断をされない、実り多い環境を与えてくれた。紛争当事者の双方が、話を聞き入れてもらう、という経験をした。私たちのグループは、国籍にかかわらず、絆と友情を築いた。この事実そのものが、私にとっては小さな奇跡だった。

日本でこの２週間を過ごすうちに、答えのまだない多くの問いが生まれ、またさらに深く紛争について学ぼうと決意した。来年から、私はイスラエル人とパレスチナ人が一緒に平和を促進するインターナショナル・スクールで働く。これから変化を生み出していこうと第一歩を踏み出す私にとって、「平和の架け橋プロジェクト」以上に素晴らしいスターティング・ポイントはなかったと思う。

長野国際交流イベントで食べていただく中東料理をみんなで準備。

パトリシア・ズロブ　Patricia ZU'ROB

パレスチナ　23歳　社会人

このプロジェクトについて聞いた瞬間から、私は好奇心でいっぱいになり、心から参加したいと思った。なぜなら、私はいつでも他の国の文化や言語について積極的に学んできたからだ。このプロジェクトに参加するにあたり、不安や恐れがなかったわけではない。ただ、同時に日本やイスラエルの人々と出会い、彼らの話に耳を傾け、自分のストーリーも共有し、私の人生のために新しい経験をしてみたいと強く思った。プロジェクトが終わった今、本当に参加して良かったと思っている。このプロジェクトのおかげで、たとえ私たちの間に違いがあっても、周りの人々に対し、もっと寛容になることができた。

さらに、このプロジェクトは他の面でも私に多くの影響を与えた。私の性格にもポジティブな影響があったと思う。なぜなら、プロジェクトを通じて、恥ずかしがりの性格を乗り越え、自由に会話を楽しめるようになったからだ。また、紛争や自分の感情について、初めて人に話すことができた。それにイスラエル側の話を聞いて、彼らも私たちのように苦しんでいることを知った。つまり紛争の両側の視点を持つことができたと言える。ニュースや周りの人が言うことに自分が簡単に影響されてはならないということを学んだ。もっと読んで、聞いて、紛争を生きる多くの人々のことを深く知りたい、と思うようになった。そして、日本人から学んだ、助け合いの精神と秩序を忘れたくないとも思った。

プロジェクトを経て、将来に向けていろいろなプランが見えてきた。例えば、これと似たようなプロジェクトに参加し、世界中の人々と出会うこと。また、教師として、それがカリキュラムに含まれてはいなくても、紛争に関する自分の経験を生徒たちに話し、寛容と受容の精神を広めていきたいと思っている。そして、意見が異なる相手とも、相互理解に努めることの必要性を伝えたい。

最後に、私は、もっと多くの人々が紛争について関心を持ち、選挙では責任のあるリーダーを選ぶことを望んでいる。私の最大の心からの希望は、すべての人々を、その宗教、肌の色、国籍にかかわらず、同じ人間として扱うことだ。意見の食い違いは人間として当たり前のことだ。だからこそ、相手の話を聞いて、理解しようと努めることが、相互に敬意を払いながら生きるということではないだろうか。

ムアット・アブ・スネイネ Mu'ath ABU SNAINH

パレスチナ　21歳　社会人

このプロジェクトに参加するにあたり、私はこれまで参加してきた平和構築プログラムとは全く異なる動機をもっていた。実は私にとって当初大事だったのは、プロジェクトがどんな内容かとか、参加者が誰かよりも、むしろ開催地が日本であるということだった。2週間のプロジェクトが終わった今、その日々を振り返り、素晴らしい友人たちと、息をのむほど美しい国で過ごすことができた喜びを噛みしめている。日本という国、そしてこのプロジェクトは、様々な面で私の想像をはるかに超えて素晴らしいものだった。

日本で過ごした時間の中で、日本がどんなに素晴らしい国であるか、そして人々がどのように問題に対処し、共に生きているかを学んだ。プロジェクトを通じて、自分が生きている紛争についてもより深く理解できた。それができたのは、他の人々の話に耳を傾け、自分も自身のストーリーを共有できたから、そしてバッ

クグラウンドの異なる仲間たちと何の問題もなく2週間共に生活できたからだった。この経験は、自分の夢が現実になるかもしれないという希望を抱かせてくれた。

このプロジェクトの後思うことは、いつか自分の体験を全て活用して「平和構築軍」を形作りたいということだ。この「軍隊」は、いつか実際に行動を起こして、人々が憎しみ、恐怖、分裂を経験せずに安心して暮らせる世界を作る。私は、戦争、人種差別、分離などを、（現在のように）日々の登下校時に実体験するのではなく、歴史の本からのみ知るような世代を作りたい。実際にその世界を自分の目で見ることはできなくても、人生の最後に、何か変化を起こせた、と満足して死にたいと思う。過去2年間、平和構築は私のミッションであった。今後も私が生きている限りそうあり続けるだろう。

もし私が何かを信じているとしたら、それは人類の持つ「可能性」である。人類はこれまで多くの素晴らしいことを成し遂げてきた。いつの日か、異なるバックグラウンドを持つ人々の平和的な共生も、人類が成し遂げる偉大な業の一つとなるだろう。

ハンナ・フーリ　Hanna KHURY

イスラエル国籍アラブ人　24歳　社会人

このプロジェクトについて初めて知ったとき、奇妙な感情と同時に、平和について語り、平和をつくる人になってみたいという好奇心や興味が生まれた。

多くの質問が私の頭を駆け巡った。誰が参加するのか？イスラエル人、パレスチナ人、日本人がいるのか？それはどのような状況なのだろう？また、私たちはどのように、故郷で経験している紛争について語り合うのだろう？

プロジェクト開始直前にもたくさんの問いがあった。イスラエルとパレスチナ双方が直面している課題は？イスラエル側の経験はどう異なり、私たちは紛争についてどれくらい異なる考えを抱いているのだろう？どのような言葉を使って紛争を語り、どのような方法で現実を直視しているのだろう？

プロジェクト参加を通じて、私の頭を満たしていたこれらの問いへの答えが見つかったと思う。また、このプロジェクトは、相手の話を聴くことにより、これまでとは異なる考え方と成熟した知識や思想を与えてくれた。それにより、相手の立場への理解が深まった。

家に戻ったら、まずはプロジェクトで得た新たな考えや知識を、家族、友人、コミュニティなど、周りの人々に広めたいと思う。それに加えて、将来また似たようなプロジェクトに参加したいと思っている。

私たちは、聖地が平和の中にあるように祈り続ける。またパレスチナ人とイスラエル人が、問題を解決し、対立を削減できるように祈る。双方が、問題、紛争、人種差別を乗り越え、平和と喜びのうちに共存できることを望んでいる。

「平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ5,9）

マラック・キナニ　Malak KNANA

イスラエル国籍アラブ人　19 歳　学生

平和の架け橋プロジェクトに参加したのにはいくつも理由があった。私は、日々の生活の中で、私の将来について特にどの学問の道を進むべきかについて思い悩み、多くのストレスを感じていた。私にとってこのプロジェクトは、心配事を少し脇に置き、一息ついてリフレッシュする機会だった。プロジェクトに応募してから、プログラムやスケジュールについて読んでみて、日本の文化や自然の美しさにも興味を持った。だから、日本についてもっと学ぶこともゴールの一つになった。

また、このプロジェクトは、私に大きな影響のあるイスラエル・パレスチナ紛争について話す機会でもあった。私は、とても多様な環境で育ち、他の人々との違いを学び、尊重するよう教えられてきた。※

だから、新しく日本人、イスラエル人、パレスチナ人と出会うことは、私の紛争に関する知識を広げ、そのいろいろな側面を学ぶチャンスだった。

互いに相手にふれ合う２週間を超える共同生活で、お互いの話に耳を傾け、世間話から真面目な議論まで行い、私は自分の目標を達成できたと思う。私は、自分自身に対しても平和的で、落ち着いた考えを持てたし、他の国からの友人もでき、未解決のイスラエル・パレスチナ紛争に関してもより明らかな理解を得ることができた。

平和の架け橋プロジェクトでは、自分自身やそれ以外のことについて深い理解を得ることができた。その中でも大きな発見は、イスラエル・パレスチナ紛争は、人の手によってコントロールされているということである。世の中には、人間の力ではコントロールできないような問題もたくさんあるのに。このことに気づいて、二国間の平和構築のために活路を見出す希望とインスピレーションが与えられたと思う。他にも私たちは、日々色々な紛争 ― 政治的な対立、個人的な対立、環境的な対立に関わって生きている。

このプログラムの経験に基づいて、私は今後もイスラエル人、パレスチナ人双方となるべく多く関わっていき、紛争に関するお互いの体験を共有し、話し合っていきたいと思う。たとえ、必ずしも同じ考え方ができないとしても、相手に耳を傾ければ傾けるほど、私たちはもっと多くのことを学び、もっと深く結ばれることができるのだ。可能であれば、もっと国外の人々と出会いたい。彼らの別の視点から紛争がどう見えているかを知ることができれば、それは解決の糸口になると思うからだ。

私は今、この現実を変えるための大きなエネルギーと、異なる価値観や思想にもっとオープンになる決意と希望を持ってふるさとに戻っていく。みんなが、紛争に関するそれぞれの体験を共有できるようになればいいと思う。互いに耳を傾け、共感することによってのみ、共存、尊重、内なる平和が達成できる。私は、みんなが一つとなり、多様で愛にあふれた平和なコミュニティで生きていくことができると信じている。

※　マラックは、幼稚園から高校まで、イスラエルj人とアラブ人が一緒に学ぶ、HAND IN HAND（手に手を取って）という特別な学教で教育を受けた。

パレスチナ伝統のダンス「ダブケ」をみんなで。
（長野国際交流イベントにて）

大村 梨琴　Riko OHMURA

日本　18 歳　高校生

このプログラムの 16 日間で得ることができた学びは私の一生の財産であり、宝です。このような貴重な経験をさせてくださったことに、このプロジェクトに関わったすべての方々に、心から感謝したいと思います。

イスラエル人、パレスチナ人、日本人という言語も文化も違う若者 12 人で寝食を共にし、何度もディスカッションをした経験は、平和について、日本の文化について、そして何よりも自分自身について考え、見つめ直した、とても貴重な機会でした。

私が自分に課していた目標は二つありましたが、この二週間は、ゴールを達成した以上に多くの実りを私にもたらしてくれました。

私の一つ目のゴールは、パレスチナ問題・平和構築についての自分の無知を克服することでした。パレスチナがどこかも知らなかった私は、知識を得ることで問題の複雑な構造を理解することが、平和の糸口を見つけるのには欠かせないと思っていたからです。しかし、たくさんのディスカッションやアクティビティ、カラオケパーティーなどをとおして、私に必要だったのは知識だけではなく、紛争を「自分事」としてとらえることだったのだと気付きました。遠い国の、自分たちには関係ないかのように思えた「紛争」は、毎日、この一分一秒彼らが向き合わなければいけない「現実」なのだという事実が、彼らと長い時間を共に過ごすことで、胸に迫ってきたように感じられました。また、私たちは時として、紛争の解決には様々な立場の視点が欠かせないことを忘れがちです。このプロジェクトではイスラエル・パレスチナ双方の意見を平等に聞く機会があり、私たちがただ紛争の知識を得るだけではなく、バランスの取れた考え方を養うのを手助けしてくれました。

私の二つ目のゴールは、私が日本人として・第三者の人間として・自分という人間として何ができるのかのヒントをつかむ事でした。この二週間は、今までの歴史の授業とは全く違う、日本という国の在り方を教えてくれました。自分たちの歴史を深く見つめ直し、そこに潜むいくつもの教訓に改めて気づかされたのです。東日本大震災のような脅威にさらされながらも自然と共生し続けていることや、日本人がどれだけ、もう二度と過ちを繰り返さないように、第二次世界大戦の記憶を保存するのに力を入れているかをもう一度見つめなおし、はっとさせられることが数多くありました。来日したメンバーのうちの一人がこう言いました。「日本の人々は自然と共生し続ける道を選んだ。自然は、誰もコントロールすることのできない力なのに。僕たちが対立しているのは同じ心を持った人間なのだから、一つの土地に共存することだって不可能じゃないかもしれない」。普段は気付かないけれど、日本人のこうした価値観は、ひょっとしたら世界の人たちに勇気と希望を与えられるのかもしれない、と気づき、大きく勇気づけられました。

第三者の人間として何ができるのかについて、私はより良い答えを探すためにもっと努力する必要があります。しかし、第三者を交えて話し合う、まさにこのようなプロジェクトこそが平和の架け橋を作るのに効果的だと感じました。第三者にしか見えないことがあること、そしてそれをシェアしていくことがバランスの取れた価値観を学ぶために欠かせないのだと学びました。

最後に、私自身が何をできるか、それは一番難しい質問でした。しかし、素晴らしい友人たちは、私がありのままでいることを受け入れ、肯定してくれました。そして相手の話を開かれた心で聞くことが相手の悲しみを分かち合い、癒すことに繋がるのだということも教えてくれました。この気づきをとおして築かれた強い絆は忘れがたいものとなり、もしこの先同じような機会があった時は、相手の感情を受け入れ、話を聞くことができるという自信を与えてくれました。

長野での滞在中に、善光寺の境内で盆踊りをみんなで踊った経験は、生涯忘れられない思い出のうちの一つです。みんなの笑顔とゆかた姿がまぶしくて、とても嬉しく思ったのと同時に、私は悲しさが沸き起こってくるのを止められませんでした。通りを何の危

険も感じずに歩いたり、屋台で何でも好きなものを食べたり、私たちにとって当たり前に感じられることが、彼らには「夢の中のことのよう」に感じられる。そこではっきりと彼らの置かれている境遇がどれほど辛いものか、自分が今までどれほど恵まれた環境にいたかを知ることができました。いつの日か、彼らが何の不安も感じずに、通りを歩けるようになる日が来ますように。イスラエル人も、パレスチナ人も、お互いを認め合える日が来ますように。

そのために、私ができることは何か。それをこれからも自分に問い続けていこうと思います。

茂野 新太　Arata SHIGENO

日本　22 歳　大学生

実を言えば、私は当初このプロジェクトに参加する意志はなかった。日本人参加者が少ないと聞き参加を決意したが、私の当面の紛争観、そしてイスラエル・パレスチナの紛争に関する知識は、2018 年 3 月のスタディ・ツアーで現地を訪れた時におおむね得られていたからだ。また、人と人の紛争をテーマとするスタディ・ツアーで東日本大震災の被災地を訪れるなど、主旨と内容が乖離しているように見受けられる部分もあった。原子力発電所の事故を人災ととらえて人間社会の問題に落とし込むことも可能であろうが、それでもパレスチナ問題の参考にできるほどの深掘りは難しいだろう。願わくは広島、長崎などを訪れ、紛争の遺産を見たいところではあった。

だが、消極的な感想を抱いてしまうのは私のせいでもある。プロジェクトで長野に滞在中、東京での外せない用事により半日不在の日があった。ほかの日本人参加者から聞いたところ、私が欠席している際にパレスチナ問題について両当事者が「あなたが相手の立場だったら」と互いの状況に身を置いて議論したそうだ。その長時間に及ぶディスカッションは各人の内面に深く踏み込むものであったらしい。あくまで伝聞に過ぎないが、日本人参加者の感想からも、その時間が決して和気あいあいとしたものではなく、互いへの不満、不信感なども吐露する真剣なものであったことが見て取れた。

確かに、私も中東からの参加者と個別に話しているとき、あるコミュニティからの参加者が他者の理解に苦しんでいる感想を何度か耳にしていた。紛争当事者同士の溝は非常に深く、容易には払拭できないものであると実感した。断絶とは簡単に修復できるものではない。現代の日本社会に大戦の記憶が根強く残り、戦後 70 年を超えても戦争体験者やその遺族の心に影を落としている事実は、若輩者ながら察している。だが、どこかで紛争に終止符を打ち、過去のものにすることはできる。巻き込まれる次世代の人数を減らすために、それは早ければ早いほどいい。

私が 2018 年のスタディ・ツアーで抱いた感想は、敵対する者同士の友情が平和への希望になる、というものだった。最初に述べたとおり、私はもともと今回のプロジェクトに遅れて参加した身なので、私の目標は、学びというよりイスラエルとパレスチナの参加者が実り多い時間を日本で過ごし、互いに友情を深められるよう尽力することであった。その目標は少なからず達成されたように思う。仙台、長野、東京と時間を共にするにつれ、最初はぎこちなかった参加者同士が心の距離を縮めていく過程には、私も少なからず興奮を覚えた。今でも WhatsApp という SNS のグループチャットが彼らの様子を知らせてくれる。私も再び中東に行くだろうし、その際には必ず彼らと連絡を取り、厚かましく案内を頼むだろう。

今の時代は航空券も安くなり、オンラインでも友人とつながれる。よく言われることだが、今までになく容易に海外とのつながりを持ちうる私たちの世代は、今までの国対国のパイプしかなかった国際関係にも、個人レベルで大いに変化を与えうる。昨年のスタディ・ツアーでは、ひたすら情報を吸収し咀嚼するばかりだったが、今回のプロジェクトではこれから私たちができることをじっくりと考えられたように思う。

髙橋 彩子　Ayako TAKAHASHI

日本　19 歳　大学生

今回平和の架け橋プロジェクトでは、多くのことを学んだ。その中でも「自分自身で確かめる事の大切さ」に気づいたことは大きな収穫だった。

このプロジェクトでは、実際に人に会うこと、またその人から体験や意見を聞くことで、本や資料からではどうしても同じ世界で起こっていることとは考えられなかったことが現実に起きていることなのだと認識できた。例えばプロジェクト前に、「パレスチナからの参加者の一人は、今回初めて自分の暮らす地域から出ることになる」と聞いた時に、頭では理解しても、どこか信じられなかった。しかし、実際プロジェクト中に仲良くなった目のまえにいる彼女の口から「夢のようだ」「本当に初めて出てきた」と聞いて、自由が制限された暮らしをしている人が同じ世界にいることが私の中で一気に現実味を帯び、今まで以上に他人事ではないと感じるようになった。今までも他人事に思っているつもりはなかったが、無意識のうちに本の中や画面の向こうの話だと割り切っていた自分に気づき、ショックだった。

地域の様子や情勢にも、自分で確かめなければ分からないことがたくさんあるのだと知った。話をする中で、イスラエル・パレスチナからの参加者やそこに行ったことがある日本人が私にはない視点を持ち、それによってより深い議論が可能になっていることを確信したのだ。恥ずかしながら、私はイスラエル・パレスチナに対し、空襲や高くそびえる壁のイメージばかりを持っており、正直どこへ行っても危険な場所だと思っていた。それゆえ、参加者の皆から聞く美しい風景や都市での暮らしに驚き、魅了された。メディアからの情報ばかりで成り立つ自らの知識に偏りがあることを忘れ、それがすべてだと信じかけていたのだ。ほかの分野の知識においても、想像以上の偏りがある可能性は高いと思うと、怖くなる。自分で見て、体験することで情報を得れば、偏りがなくなるとは思わない。それでも、自ら確かめたものには誰によっても“切り取られて”いないという点で、メディアにはない信用性があるといえる。

私は、イスラエル・パレスチナ・日本からの参加者が出身地に関係なく、良き友人となったことが、平和への一歩に少しでもつながっていると信じている。それでもプロジェクト後、平和に向かっているとは言えないニュースを横目に、お互い会うことのできない仲間と連絡を取っていると、平和とプロジェクトは別次元にあるのではないかと、平和実現に懐疑的になる。今できることは友人となり、つながりを保つことくらいだが、もう一段階進んだ「何か」をしなければこの活動があまり平和につながらないまま終わってしまうのではないかと感じるのだ。その何かを探るため、もっと世の中のことを知り、考えたい。今回できた仲間やこれから出会う人たちとより深く意味ある議論をし、自分たちに何ができるのか見出していきたい。そのためにも、自分で確かめることに今までよりも強くこだわり、知識を広げていこうと思う。

喜祈（日本）、オール（イスラエル）、ヤクーブ（パレスチナ）3人による
ピアノ連弾即興曲（長野交流イベントにて）

スタッフの声
Voices of the Staff

福島 貴和　Takakazu FUKUSHIMA

信州善光寺玄証院 住職、認定 NPO 法人 聖地のこどもを支える会 理事

長野での「平和の架け橋プロジェクト」

プロジェクトの名称は《平和の架け橋》、今年は、長野の国際文化交流イベントやアクティビティ、そしてホームステイの内容を少し工夫してみました。なぜイスラエルやパレスチナからこの青年たちが長野にやって来たのだろうということを、もう少し皆様に理解していただくためです。

先ず、青年たちのために配慮したことは、アクティビティをしやすくするためにボランティア・センターのセミナールームをお借りしたことです。やはり玄証院の狭い部屋でするよりも、活発に行動できたようです。

次に、ホームステイの家族にもあらかじめ、青年たちの来日の目的をご説明して、理解していただきました。後で話を聞くと、初めて外国人を受け入れたので、珍しさが先にたってしまったご家族もあったようですが、とにかくホスト・ファミリーの皆様には、ほんとうにお世話になりました。皆様の温かいおもてなしに、若者たちは心から感謝しておりました。

残念だったことは、大学が夏休み期間中で、信州大学や清泉女学院大学など長野の学生が参加できなかったことです。もし、このプロジェクトが次回も同じ時期に開催されるのであれば、事前に広報活動をする必要があることを痛感しています。

今年は若者たちが善光寺の盆踊りに参加できて、とても良かったと思います。彼らは全員、とても楽しい時を過ごしたようです。ただ、反省点は、市民の方々には、「外人がゆかたを着て盆踊りをしていただけ」と映ってしまったかも知れないことです。彼らが日本とかけ離れた環境にある紛争地から、平和を求めて《平和の架け橋プロジェクト》に参加していた青年たちであることを、これまた、事前にメディアなどをとおして周知しておいたほうが良かったと思います。

長野は今（11 月 1 日現在）、台風 19 号による千曲川氾濫の被害で大変な状態にあります。善光寺は、ありがたいことに何の被害もありませんでしたが、今日も奈良県からのボランティアが玄証院に泊まっています。この《平和の架け橋プロジェクト》でも東日本大震災の後 5 年間にわたって被災地でボランティア活動をしましたが、今回「支援をする」のと、「支援を受ける」のでは全く違うということがよく分かりました。

私たちの「平和の架け橋プロジェクト」も、長野市民の皆様のご理解とご支援をさらに広くいただける活動になればと思っています。

ハンドベル・アンサンブルNAGANOの皆さんによる演奏（長野交流イベントにて）

中山 宏、夕里亜
Hiroshi, Yuria NAKAYAMA

認定 NPO 法人　聖地のこどもを支える会　理事

家族で参加したプロジェクト

私たちは、小６の長男（泰羊（たいよう））と小３の次男（喜祈（よしき））と一緒に、家族でこのプロジェクトに参加させていただきました。

仙台でも、長野でも、たくさんの方々と出会い、たくさんの方々にお世話になりました。

イスラエルとパレスチナから来た10名の若者たち、そして３名の日本人の参加者、また、仙台ドミニコの家のシスター方、仙台元寺小路教会の皆さん、上西博先生、カリタス南相馬ベースのシスターやスタッフの皆さん、長野では、玄証院住職の福島さんをはじめ、田村さん、ハートネットの皆さん、ゆかたの着付けをしてくださった長野教会の方たち、ボランティアセンターに来てくださった方々…、本当に素晴らしい出会いをいただいたことに感謝しています。

このプロジェクトの中で、特に心に残っていることの一つは、仙台から福島県双葉町へ行き、帰宅困難地域の様子を見たことです。東日本大震災のあと、福島を訪れたのは初めてで、本当に広い地域で、未だ、人が住むことのできない家や動かすことのできない車、荒れ果てた町、ソーラーパネルの立ち並ぶ田畑の跡地が続く風景をマイクロバスの車窓から見ている時には、そこで命を落とされた多くの人々と、家族や友人を失った人たちのことを思わずにいられませんでした。

仙台の元寺小路教会で行われた教会の方々との交流会で、『花は咲く』の歌をみんなで歌った時に、震災に遭われた方がしばらく歌っていなかったこの歌を久しぶりに聴いて涙が溢れたと、ドミニコ会のシスターがおっしゃっていたのを聞きました。深い悲しみや辛い出来事を耐えているその思いは、時間が経っていても完全に消えることはないのだということを教えられました。

もう一つのことは、子供たちと一緒に参加できたことです。

男の子二人の兄弟ですので、一緒になるとすぐに喧嘩が始まってしまい、プロジェクトの進行に妨げになってしまうのではないかと心配していました。でも、長男も次男もそれぞれ子供なりに、自分も参加者の一人として、何か手伝いたい、できることをしたい、若者たちと一緒に毎日の活動にも参加したいと、いろいろな役割をやらせていただいて、本当に楽しそうに過ごしていました。イスラエルと、パレスチナ、そして日本の青年たちが、息子たちをとても可愛がってくれたことにお礼を言いたいです。

長野で行った交流会では、パレスチナ人のヤクーブ、イスラエル人のオールと次男 喜祈の３人がピアノで即興曲を連弾演奏し、皆さんに聴いていただいたことは、次男にとって心に残るよい経験だったと思います。

スタッフとしてはじめて参加して、「あの時、ああした方がよかった」、「もっと上手くできたのではないか」、「あれが足りなかった」と、反省する点もありましたが、それはまた、来年のプロジェクトに生かしていかれたらと思います。

イスラエルとパレスチナの若者たちの心に生まれた友情が、これからも固く、深く結び続いていくことを祈っています。

ヤクーブ・ガザウィ　Yacoub GHAZZAWI

30 歳　イスラエル・パレスチナグループの責任者および現地スタッフ

グループリーダーになることは、大きな責任を伴う。しかしそのグループが、異なる背景や文化を持つ人々によって成り立っている場合、リーダーの責任はさらに重くなるのではないだろうか。私は、このNPOが私を信じてリーダーとしての役割を与えてくれることに感謝している。だが、異なるバックグラウンドやメンタリティを持つ参加者間の和を保つことは、毎回大きな挑戦だ。彼らはイスラエル人、パレスチナ人、日本人、しかも宗教は、キリスト教徒、ユダヤ教、イスラム教、仏教、神道と多彩で、神を信じない者もいた。私自身、彼ら一人ひとりを大切にすると同時に、彼ら同士が尊重し合うように導く責任があった。互いの持つ多様性を大切にすることを教え、さらに、互いの異なる文化や行動の仕方に敬意を払いながら共同生活をするよう導いていくことも不可欠だった。

大きな困難にもかかわらず、今年は本当に良いプロジェクトだったと喜んでいる。今回は、過去数年間私が参加したプロジェクトの中でも最良のグループだったので、とても幸せに思う。彼らの会話、議論、ワークショップにおけるオープン・マインドな姿勢は、このグループの豊かさを表していた。これは、今年の選考の過程がとても良かったからだと思う。彼らの友情は、まるで形のない泥から形作った美しい像のようなものだった。この友情が末永く続いていってほしいと思う。彼らの関係があまりにも良好で、もともとの友だち同士を連れてきたのではないか、と思ってしまうくらいだった。

私は、思い出す度に微笑ましく、幸せにしてくれる忘れがたい体験をした。東京での自由時間中、参加者がカラオケに行きたい、と頼んできた。私は疲れていたので、初めは場所だけ教えて自分は宿泊先に戻ろうと考えていたが、結局最後までみんなとカラオケでの時間を過ごしてしまった。人生で初めて、歌うのが楽しいと思った。カラオケ・ルームを満たした、ポジティブで幸福なエネルギーが忘れられない。周囲に伝播していくような、一人一人の笑顔も忘れられない。参加者同士が交流し、歌や歌詞を教え合っている素晴らしい姿を見て感動し、２時間が終わってほしくないと思うほどだった。私にとって、このプロジェクトの目的はこのような忘れがたい思い出と絆を作ることであって、間違いなくそれは成功したと思う。

最後のシェアリングの時間に、参加者全員がそれぞれに立ててきたゴールを達成することができたと聞き、本当に嬉しかった。彼らにはプロジェクトが終わった後も、つながりを持ち続け、それぞれのコミュニティで平和を実現する人となってほしい。国籍や宗教のために人を差別しないこと、これができることが第一歩だ。結局私たちは、互いを性別や人種などのカテゴリーではなく、個人として見るべきなのだ。人をカテゴリーとして見始めた瞬間に、私たちは人間性を失う。私は、このプロジェクトに参加した人々には「人間」でいてほしいと思う。プロジェクトの期間中、彼らは、互いの行動や意見がどれほど似通っているか、身をもって学ぶことができたはずだ。このプロジェクトは、参加するすべての人にとって、安全な空間である。性別、人種、国籍など関係ない。参加者は、それぞれが言いたいことを言い、表現したいことを表現できる。そしてより深く互いを知るにつれ、傾聴し、尊重しあうことを学ぶのだ。

このプロジェクトの価値とその実りを信じて、その継続のために支援し続けてくださっている皆様に感謝の意を伝えたい。ご支援が、相互理解、受容、傾聴、多様性を実践できる次の世代の新しい人々を生み出していることを、皆様に申し上げたい。このプロジェ

クトを通じて、より建設的な新しい世代のリーダーたちが生まれているのは確かである。聖地と、そして世界の平和のために、どうか今後ともご支援を賜れれば、と思う。
「平和と善（が皆様にありますように）！」《Peace and all Good！》（アッシジの聖フランシスコの挨拶）

ホームステイの楽しい「一生の」思い出！　ホストファミリーの皆様、温かいおもてなしをありがとうございました！

7 名簿
Lists of names

プロジェクト参加者

責任者

井上 弘子
（認定NPO法人 聖地のこどもを支える会　理事長）

イスラエル／パレスチナ責任者・同行スタッフ

ヤクーブ・ガザウィ

日本側　スタッフ

井上　弘子
福島　貴和師（信州善光寺玄証院住職）
田制　則子
中山　宏
中山　夕里亜
浅野　耕二

青年参加者

イスラエル

タル・ギロ	（女）
シャロン・バラク	（女）
マタン・マスラウィ	（男）
オール・ガダ	（男）

パレスチナ

マラック・キナニ	（女）（イスラエル国籍）
ダリーヌ・ラマ	（女）
パトリシア・ズロブ	（女）
ハンナ・フーリ	（男）（イスラエル国籍）
ムアット・アブ・スネイネ	（男）

日本

髙橋　彩子	（女）
大村　梨琴	（女）
茂野　新太	（男）

特別参加

中山泰羊、中山喜祈

協力団体、協力者

イスラエル、パレスチナの共催団体

中東のための ヨハネ・パウロ II世 財団
（理事長　イブラヒム・ファルタス神父）

日本での協力団体、協力者

後援　独立行政法人　国際協力機構
在日イスラエル大使館
在日パレスチナ常駐総代表部

助成　公益財団法人　三菱 UFJ 国際財団

協力　仙台教区カテドラル 元寺小路教会
仙台ドミニコの家
上西　博
南相馬カリタス
仙台平和七夕、心の港とボランティアの方々
信州善光寺玄証院
株式会社フランストラベルセンター
長野市ボランティアセンターと
ボランティアの方々、ホストファミリーの方々
ハンド・ベルアンサンブル NAGANO
聖パウロ修道会　若葉修道院
カトリック吉祥寺教会
カトリック麹町教会

鈴木　信一	北沢　美和子
加納　貞彦	竹節　真里子
中尾　有希	田中　晶子
伊藤　哲也	田村　久恵
金子　貴之	内藤　歌子
川瀬　真紀子	高塚　富士子
冨沢　佳代子	手塚　均
原　由美子	渡辺　陽子
三石　祐司	清水　るみ子

講演会　出川展恒

順不同　敬称・肩書略

支援団体と支援者 Donators

一般支援団体（11団体） Organizations

大阪聖ヨゼフ宣教修道女会箕面修道院
フランシスコ聖クララ会大修道院
カトリック吉祥寺教会マリア会国分寺地区
厳律シトー会那須の聖母修道院
守護の天使の姉妹修道会
女子跣足カルメル修道会
聖ドミニコ宣教修道女会坂出聖マルチン修道院
聖フランシスコ病院修道女会長崎修道院
聖フランシスコ病院修道女会姫路修道院
聖心の布教姉妹会 本部
仙台ドミニコの家

一般支援者（131名） Individuals

秋山 佳穂
赤崎 克俊
天野 直秀
東 幸江
伊藤 勝子
伊藤 多恵子
伊藤 友香
井手 公平
磯部 裕子
稲葉 健典
岩崎 正幸
石原 淳一
泉 知子
池上 遥
板垣 勤
翁 羽翔
遠藤 久夫
遠藤 香恵子
奥村 聡
岡 晶子
岡田 光浩
岡島 順子
及川 幸子
小塩 恒子
小田 淳
小野 修
太田 あき代
太田 晴子
大西 茂雄
大泉 廣
大谷 郁子
大野 光子
尾本 由美子
加地 貴美子
加藤 まゆみ
加納 貞彦
鎌田 まさ子
勝原 孝子
勝田 いつ子
神原 尼雛子
川口 節子
川本 和子
蕪木 利夫
鏡原 えり
北原 豊子
木村 浩之
木村 靖子
窪田 淑子
熊谷 マリ子
コーナン・ミッシェル
小林 徹也
小林 惇
後藤 幸
後藤 礼子
佐藤 光子
佐野 澄子
坂山 鉄志
坂本 雄郎
宿澤 恵子
清水 紀代子
白水 明代
白柳 隆明
鈴木 典子
関 安幸
玉川 幸子
高岡 節子
高橋 裕子
高島 友子
高野 千草
谷口 寿美枝
谷山 正恵
田制 則子
武田 七七子
柘植 薫
土屋 道子
寺尾 澄江
出川 展恒
徳能 恵子
富田 道代
中村 季子
中村 寿美
中島 聖子
中島 敏夫
中本 徹信
中野 幸子
中里 光代
長坪 光
内藤 歌子
西田 百合子
野田 健太郎
早川 昌江
橋本 和子
原科 節子
半田 和巳
林 一江
濱口 秀昭
古屋 恵子
古杉 絢
古田 瑩子
深田 莉映
藤井 猛史
福瀬 くに子
福田 幸子
淵上 恂子
細谷 彬
星 昇次郎
本間 早苗
宮下 幸恵
宮野 美智子
溝口 泰子
三島 八重子
森 恵子
森本 俊子
森本 明子
安田 美知子
山岡 節子
山下 るみ子
山口 裕子
山田 康子
山田 百華
山田 涼華
矢島 友子
吉川 英子
吉川 八重子
吉田 良子
吉野 三保子
渡部 朋子
渡部 満
渡辺 陽子
渡邉 公伸
匿名希望者

（敬称略）

PROJECT REPORT

イスラエル―パレスチナ―日本

平和の架け橋プロジェクト 2019　　報告書

仙台「平和七夕」の折り鶴の飾り

全国から毎年百万羽を越える折り鶴が送られてくるとか。それを使って七夕飾りやレイを作って、核兵器廃絶を訴える市民活動。

編集スタッフ
井上 弘子
佐藤 克裕
浅野 耕二

翻訳協力
中尾 有希

校正
村上 宏一

写真提供
井上 弘子
福島 貴和
浅野 耕二
ダリーヌ・ラマ
中山 夕里亜

平和の架け橋プロジェクト　2019　実行委員会

認定NPO法人　聖地のこどもを支える会
〒164-0003　東京都中野区東中野5-8-7-502
TEL & FAX　03-6908-6571
URL　https://seichi-no-kodomo.org
E-mail　ispalejpn@gmail.com

John Paul II Foundation for the Middle East
Hebron Jerusalem Street 475, P.O.Box 24 Bethlehem
TEL (972) 2 274 55 57
FAX (972) 2 275 24 97
URL　www.jpii.ps
E-mail　info@jpii.ps

発行日　2019年11月22日

写真　表　紙：ゆかた姿で、みんな大喜び（信州善光寺の境内で）このあと盆踊りに参加。
裏表紙：「仙台平和七夕」で、核兵器反対を訴えるために一緒に折り鶴レイを配った他のボランティアの方々と（仙台七夕祭り）。

認定NPO法人
聖地のこどもを支える会

John Paul II
foundation